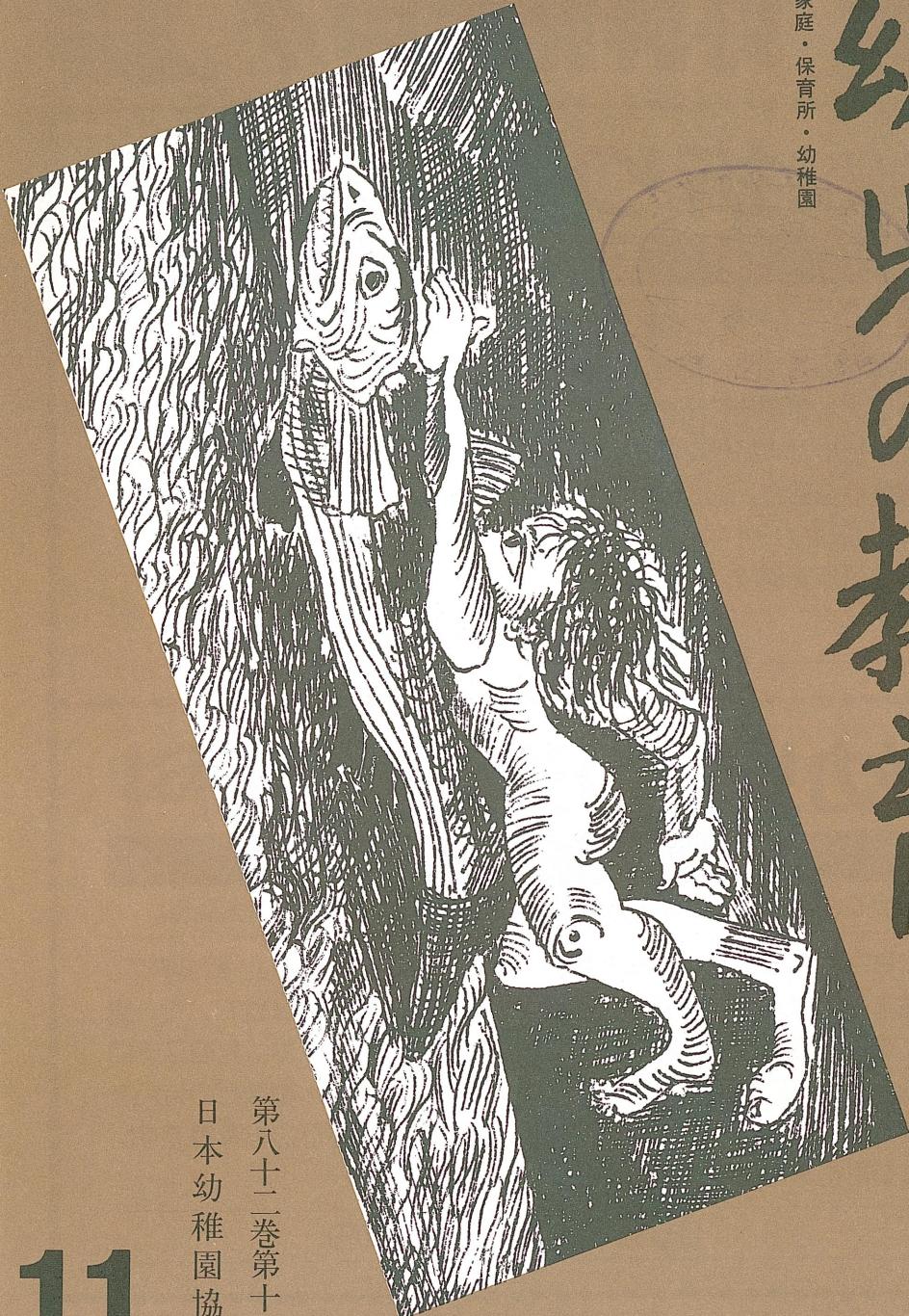


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



11

第八十一卷第十一号
日本幼稚園協会

好評発売中!!

みんなで
たのしむ

折り紙あそび

荒川智子 著

どのページも美しい写真と、保育に生かすアイデアがいっぱい。

昔から伝わった作品と、著者オリジナルの創作作品の中から子どもたちが大好きな折り紙100種余りを紹介。わかりやすい図解付。誕生日カードやプレゼント、室内の環境構成に生かすアイデ

ア、保育に生かすヒントも掲載。保育に折り紙を使うことによって子どもと心のふれあいなど、いろいろと遊びが展開されます。

B5判・64頁・定価1,200円

幼児の造形百科

桜井俊夫 著

幼児の造形活動に関する幅広い知識と技術を身につけよう。

本書は幼児に必要な造形活動の基本的な考え方をはじめ、子どもの発達に応じた指導計画の方針、さらに具体的な素材別指導方法などをとりあげた総合的な造形指導百科です。「描く」「写

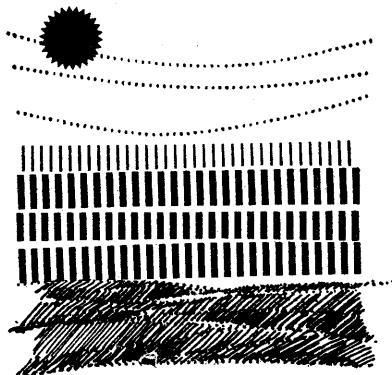
す」「映す」「作る」「壁画構成」の五つの柱からなっていて、身近な紙、粘土、木、発泡スチロール、段ボール箱などの特色を使った造形遊びの指導書です。

B5判・248頁・定価1,900円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十二卷 第十一号

幼児の教育 目 次

—第八十二卷 十一月号—

© 1983

日本幼稚園協会

「小鳥の死」または「園行事」のこと 間 藤 侑 (4)

日本の幼稚園を訪問して マイケル・クーパー (6)

外野席のおばあちゃん① 村 田 修 子 (16)

近代短歌に現われた子ども (十四) 大 塚 雅 彦 (22)

ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状 (3)

歴史ならびに現状 (3) 松 川 由 紀 子 (30)

西ドイツ、マールブルクの子どもたち…………美谷島いく子（38）

朝に思う（2）…………津守　眞（47）

幼稚園さまざま…………木原　溥子（50）

★倉橋賞受賞研究

ガンダムごっこに関する研究（その一）

——ガンダムごっこに関する保育者のイメージ——

太村　松三恵子（58）

表紙　織茂　恭子

表紙題字　比田井和子
カット　福田　理恵

「小鳥の死」または「園行事」のこと

間 藤 侑

秋の幼稚園や保育園は、行事とかけっこである。運動会に始まり、いも掘りやぶどう狩りに遠足、こうした戸外活動行事が一段落すると、すぐに文化祭やバザー、ふーっと一息ついたかと思うと、やがてクリスマス、それに個人懇談もあるし……、と考え出すと、それだけで心が慌しさを増してくる。園行事の見直しを、などと常々口にしながらも、流れ去っていく時間との競争の中で、保育の現場では、研修の機会さえままならないと嘆く声が多い。しかし、そんな悩みも、少なくとも幼児達には無関係である。

ある幼稚園でのことである。ある朝、登園して来た子ども達が、弱って死にそうな小鳥を発見する。彼らは、先ず何でも修理してくれる用務員のおじさんに助けを求めるが、もう手遅れと言わざるてしまう。先生の

提案で、それならこの小鳥が神様のところへ行かれるようになんかで祈つてあげようということになる。いつもは騒々しい五才児が、皆真剣な顔で小鳥を取り囲み、息をこらしてじっと見守っている。後からやって来たガキ大将も、いつもとは全くちがうクラスの様子に圧倒されて、そっと仲間に加わる。悲しさというようなかなり複雑な情緒を心に宿すことができるようになる五才児ならば、生き物の死の意味をかなり深く受けとめることができる。しかし、ウサギのような哺乳類の死だと、幼児にとつてはまだショックが大きすぎ、またザリガニやカタツムリなどの死は、幼稚園などでは日常茶飯事的で、血が見えないものに対してもは、ごくあっさりした対応で終る。その意味では、小鳥は、彼らの心にふさわしい対象だったと言えるだろ

う。

こうして子ども達は、一羽の小鳥の死への過程に、約一時間近くも寄り添い、見守っていた。まぶたの動きが消え、先程までの体のぬくもりが冷たいものに変つてしまつた時、彼らは、死というものの現実をおそらく初めて体験したのではなかつたろうか。かわるがわる小鳥にさわつては、「ホントダ、ツメタイ」と小声でつぶやく彼らの姿には、好奇心というよりは、厳肅な儀式に参加しているような緊張があつた。

この時、彼らは一体、どこにいたのだろうか。他のほとんどの園児がいつものようにそれぞれの好きな遊びに興じている中で、この一隅だけは、非日常的な、いわば「祝祭的空間」が現前していたと言える。とすれば、そこに流れていた時間もまた「祝祭的時間」であり、均質に永年に流れ去つていく客観的で日常的な時を測るクロノスとしての時間ではなかつた。むしろ、クロノスとは直角に交わる垂直方向の時間の流れとでも表現できるだらうか。この時この場では、ある意味で、日常の時の流れは静止していたとさえ言える

だらう。そして、この祝祭的空間に在つて祝祭的時間と共にした子ども達は、感覚的に生と死の深い意味に触れたと言うことができるだらう。そして、それを演出したのは、教師のすぐれた感覚であり、人間としての深さであつたかもしれない。

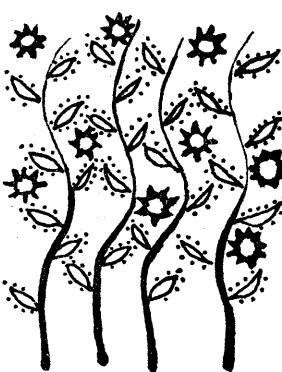
ミヒヤエル・エンデの「モモ」にも象徴的に描かれているように、現代生活はあまりにも時に追われている。新聞のテレビ欄を読み、見たいテレビのために五時になつたからと言って遊びを中断して家に帰つて来る子を見る時、四才児でもう時間がわかり文字を読めるなどと単純には喜べない、現代社会の一面の象徴を見せつけられる。こんな幼児にも、すでに、原稿の〆切に追われるおとの世界と等質な生活がしのび寄つてゐる思いがする。こうした意味で、園行事のあり方などにもまだまだ工夫の余地があると思われる所以である。

せめて幼児期だけでも、測られる時に束縛された生活を減らし、彼らの世界を、親や教師のみではなく、幾分かは神か英雄の手にゆだねておきたいのである。

日本の幼稚園を訪問して

マイケル・クーパー

松川由紀子訳



クーパー氏は、ニュージーランド教育省幼児教育課に勤める教育官で、以前に本誌にニュージーランドの幼児教育について紹介していただいたことがある。氏は、最近、日本の幼稚園をいくつか訪問した。どのような感想意見をもたれたのであらうか。このたび、原稿に記していただいたので、紹介したいと思う。（訳者）

メディアを通して外国人に与えられる日本の幼稚園に対する印象は、高度に画一化された教育機関で、学校のクラス教授に基づいた形式的な教育プログラムがなされている、というものである。日本社会の階層性は、日本の就学前教育について西洋世界にもたれており、こうした印象を増大しがちである。

日本の就学前教育に対する私自身の印象は、喜びと羨望とともに、なぜ特別な教育策略が採用されているのかについての若干の疑問が混合したものである。一九八二年一〇月、八三年六月の二回の訪問で、明らかに子どもたちのために保育し、働くことに専心している教師たちのみ会つて（その特典が与えられて）、うれしく思った。

いずれの場合も、教師たちの第一の関心は、子どもたちのために活気のある教育プログラムを与えることであるようと思えた。このことは、私が教師たちに、なぜ教師の受け持ち幼児数を減らさないようにしないのかと質問した時に、顕著であった。教師たちの答えは、日本には多くの子どもたちがあるので、受け持ち幼児数を減らせば、多くの者が就学前教育を受けることができなくなる、とした。

いうものであった。これは、教師たちがそのなかで働くなければならない制度なのである。二名の教師と四〇名の幼児のために、幼児ひとりあたり一・七平方メートルの室内遊び空間をもつて、専用に建てられたニュージーランドの園舎を、日本の教師たちは羨ましく思うにちが

いない。ニュージーランドでは、教師組合から教師と児の人数割合を減らすように強い要求が出されており、また過去に、教師たちはこの低い割合に成し遂げるために尽力して、職業的に取りかかったものである。日本の教師たちはより状況を受容しているように思える。

私は、いくつかの幼稚園を訪問して、さまざまな教育プログラムを見学した。教師の話をきくために子どもたち全員がイスにすわっている、とても形式的なクラスを始め、時として教師の遊びか子どもたちの遊びか区別することがむづかしい、とても非形式的な自由選択活動・自由遊びプログラムまで、バラエティに富んだものであった。

基本的には、これらの異なった教育プログラムはふたつの教育法を例示している。それは、教師指導型の教育法と子ども中心の教育法である。このふたつの教育法は、何が効果的な教育を構成するのかについて、異なる概念に基づいている。日本で一般的な、教師指導型の

教育法は、教師が最高のものを知つていて、教師は何をどのように教育していくのかを決定する最適の人である、と考えている。教師は知識の源として考えられ、その知識を子どもたちに形式的な方法で与えていく責任があるものと考えられているのかも知れない。一方、ニュージーランドにおいて一般的で、またいくつかの日本の幼稚園で実践されている、自由活動プログラムは、それ

その子どもは個々別々で、それぞれがユニークな成長のパターンをもつていて、それぞれが学習過程において活動主体である、という信念に基づいている。教師たちは、自由選択活動および遊びによって興味が、そしてそれが故に子どもの学習が高められる、と信じている。教師指導型の教育法では、時として子どもは、知識と技能で満たされなければならない空箱として考えられる。子ども中心の教育法では、子どもは、自己の学習における積極的なパートナーとして考えられている。子どもは、すでに言われていることだが、自己の精神を能動的に建設していく。教師は、子どもが自己の学習を促進するのに

役立つ状況を用意する。教師は、子どもの学習を援助し、理解を広めるために参加するだろう。

私が観察した日本の幼稚園のプログラムに話をもどしたい。ニュージーランドと日本のプログラムを比較することは価値があるとは思えないが、いくつかの注釈は可能であろうと思う。

私の第一の注釈は、私の見学した自由遊びプログラムについてである。私は、メディアの情報によつて、非常に形式的な、構造的なプログラムを予期していたので、いくつかの幼稚園においてなごやかに、見事に展開されていた自由遊びプログラムを見学したことは喜びであった。このプログラムを組んである教師たちは、明らかに自由遊びの考え方、子ども中心の教育ならびに子どもの福祉に捧げていた。教師たちは、子どもたちの遊びに完璧に参加する能力をもつていた。子どもたちとともに遊び、ともに学習しながら、子どもたちの高さにまで姿勢を低くしている教師たちを観察することは、喜びであつ

た。教師たちならばに子どもたちが、ともに得ている楽しみと有益は、明らかなものであった。私は、ニュージーランドにおいてもっと構造化された自由遊びプログラムに慣れ親しんでいる。そこでは、教師たちは、子どもたちとともに選ぶ者ではなく、むしろ明らかに監督者として自らを考えている。多分、ニュージーランドの教師

たちは、これらの日本の教師たちの参加の姿勢から大いに学ぶことができるであろう。日本の教師たちは、子どもたちの遊びに参加することを通して、子どもたちにとって遊びはどんな意味をもつのか、また、子どもたちの発達を援助するうえで遊びはどんな価値をもつのか、について真に理解していく方がいい。拘束のなさは、子どもたちは発達しているという認識を教師たちに十分に探究させ、子どもたちに社会的関係を発達させ、最適な学習にとって必要な、なごやかで受容的な環境を用意するにちがいない。私は、ニュージーランドの教師たちは、時として子どもたちや園ならばに園庭をきれいに保つておくことにも気つかうように思う。ニュー

ジーランドの教師たちの関心は、子どもたちの遊びに参加することよりも、むしろ振舞ならばに規律の維持に向けられているようである。教師たちが子どもたちの遊びに完全に参加していかない限り、自由遊びプログラムから最善のものを得ていくことは可能ではない。

また、教師指導型のプログラムも私を考えこませた。

三〇名あるいはそれ以上の幼児からなるクラスが、いずれのクラスも明らかに教師によって指導されていた。いくつかのクラスでは、すべての子どもたちが絵を描いていたし、いくつかのクラスでは、全員が教師のお話をきいていたし、いくつかのクラスでは、全員が折り紙をしていたし、他のクラスでは、全員が粘土彫刻をしていました。また他のクラスでは、全員がテレビを視聴していました。なぜ、幼い子がこんなやり方で教育されなければならないのだろうか。私は、これまで一度も、こんなに不幸な子どもたちや、最善のものをなしているとは思えない教師たちを見たことがない。なぜ、全員が同じ時に同

じことをすることが必要だと考えられているのか、私は不思議に思った。幼い子どもたちにとって主たる発展的な学習は、学習を楽しむことを学び、いかに学習するかを学び、集中することを学び、社会関係を発達させることを学び、空間関係を発達させることを学び、言語を学んだりすることである。ピアジェは、幼い子どもたちには、知的操怍として内面化されることができるようになる以前に、身体的経験が必要であると提言している。幼い子どもたちは、本来、好奇心のあるもので、自己中心的な傾向があり、そして彼等の興味は急速に変化するものである。幼い子どもたちは、自らの努力によって最大に学習していく。子どもの発達能力を、プログラムの遵守を強要しようとするのではなく、むしろ成長を援助するのに役立てようすることは、賢明に思われる。形式的な、構造的なプログラムを組んでいる教師たちは、自分たちの行為がいつでもすべての子どもたちに利用できるように、そして子どもたちが好きな活動を選択することができるよう、自分たちの組織を変えて

いくことによって、多くのことを達成することができるだろう。そして、なぜ、テレビ視聴なのか。子どもたちは、明らかに、朝早くテレビのまわりに皆ですわつているよりも、むしろ自己の遊びを創造したり、活動したりすることに、より教育的に集中するだろう。

多くの、これらの教師指導型プログラムにおいては、子どもたちは幼稚園の管理要求に順応しなければならないようである。幼稚園の管理組織が特殊な教育方法を必要とするようにみえるが故に、プログラムは計画され、施行されている。幼い子どもたちの要求ならびに発達能力が、これらの管理要求に当てはめられている。あまりにも多くの場合、私は、幼稚園の風土はよいように感じた。それは、よい教育プログラムがなされていったからではなく、園長や教師たちのよい性格ならび意識の故であった。あまりにもしばしば（ニュージーランドにおいてもまた）、学校教師の養成を受けた教師が幼児教育において上級の地位を得ている。彼等の経験は、学校教育制度における教育課程、時間割ならびに法規に関してであ

つた。多くの場合、彼等は、教師としてよりもむしろ管理者として就任するのかもしれない。このような人達は、学習媒介としての遊びの致命的な必要性についての認識を欠き、また不幸にも、子どもたちの知的、社会的ならびに身体的成长、発達における遊びの役割についての理解を欠いているように思える。

日本において私が見学した自由遊びプログラムの多くは、自らの教育を観察し、計画していく教師たちによってうまく遂行されていたがなかには自由遊びのプログラムを誤解して実行している者も、若干みられた。何人かの教師は、「自由遊び」のスローガンを受け入れて、子どもたちの実際の教育要求についての注意深い考えもなく、遊びのプログラムを組織していくように思えた。私の見学した、あるプログラムは、子どもたちは何を、どこで、どのようにしてもよいと、「自由遊び」を解釈しているように思えた。教育の責任を子どもたちに放棄している、そうしたやり方は、自由遊びの目標を誤解し、

何が最善に教育されるかについて、子どもが最善に判断すると考えているようである。こうした教師たちの考え方、善意だが、無責任なものであり、専門的重荷を耐える備えのない子どもたちの肩に置いているものである。

同様に、全責任を教師の手中に置いている形式的なプログラムは、子どもたちの最上の発達にとって必要な生命力を欠いている。

教育とは、いつも方向性のある行為である。現在あるところから、それに連続していくか前進した、教師が特別の教育目標と決めた時点まで、子どもの行動を変化させていくことを意味する。こうして、すべての教育は、全く発展的なものである。教育の技術は、初期行動の評価、目標の設定、ならびにこの目標に導く方法の選択を指している。さまざまな教育方法が、目標を達成するため使用される。教育の過程を図示すると、次のようになる。

一般的な目標の設定

子どもたちの評価（観察）

るが、また、教育行為がなされる前にも評価がなされる必要がある。理想的には、評価はいつも全く個別的なものであるだろう。

ひとりひとりの子どもの教育目標の設定

教育方法の選択

教育行為

子どもの進展の評価

←

評価ならびに目標を考慮して、再び教育行為

教師指導型のプログラムでは、評価の段階がより形式的になり、がらで、すべての子どもたちの平均的な遂行に基づきがちである。自由遊びプログラムでは、評価はひとりひとりの子どもたちを観察することによってなされ

教師指導型のプログラムでは、評価の段階がより形式的になり、がらで、すべての子どもたちの平均的な遂行に基づきがちである。評価はひとりひとりの子どもの要求にかなうように計画されなければならぬ。形式的に構造化された教師指導型のプログラムは、子どもはあらかじめ決められたプログラムに適応することが求められるが故に、管理上運営しやすいように計画されがちである。計画的になされない自由遊びプログラ

ムでは、ひとりひとりの子どもに価値ある目標の設定が

適切になされず、形式的なプログラムでは、管理運営面に強調を置きすぎる。よいプログラムは、管理上の必要と子ども中心の計画が調和を保っているものである。

自由遊びプログラムは、意図的に考えられた教育目標と相反するものではない。教育目標は子どもを観察して学習へと導くことによって達成され、教師の技術はどの段階でも必要なものである。教育は、子どもの興味が最も高まっている時に起こり得るものである。

ニュージーランドの幼稚園の教師たちは、子どもたちがいつでも幅広い活動の範囲を利用できるようにして、教育目標を達成しようとしている。室内外で、子どもたちが利用できるように設置していなければならないものは、次のような活動である。

❖貼合せ（コラージュ）

❖描画

❖絵本

❖楽器ならびに音楽的活動

（さらにいくつかの幼稚園でみられるもの）

❖調理あるいは面づくりなどの特別な活動

〔室外〕

❖走ったり、ゆれたり、平衡を保つたりする筋肉運動

に必要な空間ならびに遊具

❖砂遊び

❖水遊び

❖冒険遊び

❖組み立て遊び

これらのものが、子どもたちが自由に選択できる基本的な活動と考えられている。教師たちは、注意深く子どもたちの遊びを観察し、教育可能性を見積って介入していくだろう。

〔室内〕

ままごと遊びあるいは想像遊び

❖操作活動——数珠つなぎ、パズル、構成玩具

❖練紛あるいは粘土

三、四歳児の発達に関する教師の知識の枠内で、子どもたちの最初の評価がなされる。最初の評価によつて、教師はひとりひとりの子どもの身体的、知的能力ならびに社会性発達に気づく。それから教師は、この観察を、すべての子どもたちが参加する活動の計画の基礎として、ならびにひとりひとりの子どもに個別に介入する基本として、用いる。それ故、ニュージーランドの教師にとって、自由遊びは、子どもの全対的な自由を意味するものではない。自由遊びは、教師が子どもの発達要求に合うように計画した、さまざまな活動の範囲から選択する自由を意味している。こうして、教師は、プログラムの責任を保有し、子どもに関する技術や発達に関する知識を用いて、幼い子どもたちの身体的、知的ならびに社会的発達を助長させる諸活動を用意していくのである。

私が見学したいくつかの日本の幼稚園において、障害をもつた子どもたちの参加がみられたことは、私にとって特にうれしいことであった。ここ二十数年間、ニューリー

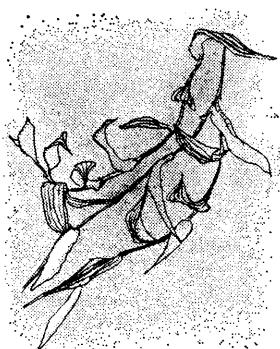
ジーランドは、障害児と普通児の統合教育の実践を発展させている。統合教育実践は、障害児に正常な行動パターンを発展させることを励まし、普通児から受ける刺激を楽しむことを促進させるとともに、普通児に障害児に対する寛容性ならびに受容性を教育していく。

しかし、私は、日本の幼稚園においてこうした障害児にどのようなプログラムがなされているのか、疑問に思つた。障害児の教育要求が適切に評価されていなくて、また個々のプログラムもうまく展開されていなくて、私は満足できなかつた。もし、障害児の主たる教育がうまくいっておれば、その時には、注意深い評価、技能および言語の教育、ならびに幼稚園のプログラム構造のなかでの評価がなされなければならない。学習を運にまかせることは十分ではなく、また、自由遊びプログラムのなかに障害児を参加させておけば、後年の自立に必要な技能、態度ならびに習慣を学んでいくだらうと考えることは、適切なものではない。もし、教師たちが注意深く評価し、プログラムが個々の子どもに作用するならば、多

くの技能ならびに習慣は、普通の自由遊びプログラムのなかで教育されることができるものである。多くの場合、主たる幼稚園セッションから短時間障害児を連れ出すことが必要であろう。しかし、そうした直接的な教育は五分以上も続くものではない。わずかな時である。

私は、日本の幼稚園を訪問する機会を二度もって、いずれも、教師たちの献身性、ならびに子どもたちに自発性、感受性を見ることができて、うれしく思った。私は、この自発性と感受性が育成され、子どもたちの知的好奇心や創造性の発達に用いられるようと考えたいと思う。多くの自由遊びプログラムでは、それは可能だと思うが、残念ながら、形式的に構造化された学級タイプのプログラムでは、子どもたちがこの自発性を保持していくことはできないと思う。形式的な構造化されたクラスルームは、子どもたちを拘束しがちで、また、一定の思考や活動への順応を促進しがちである。そして、長い間には、他人に決定を頼り、自己の創造的能力に自信がな

く、自己の思考を学校のジラバスの厳格な要求に限定する、こうした生徒や大人をつくりだすにちがいないと、私は懸念している。私は、全く日本訪問を楽しんだ。私は、こうした訪問の機会を与えて下さった人々に心から謝意を表したいと思う。そして、外国の見学者をとても楽しくさせた、教師たちの献身的な姿勢を保持しつつ、子どもたちに柔軟な、創造的な、創作力に富んだプログラムが用意されていくように、私は、制度が変更されることを望みたいと思う。



外野席の

おばあちゃん ①

村田修子



「おばさん、どこへいくの」お茶大から音羽の方へ
坂をおりて行ったところにある地下鉄のり込んで
腰をおろした途端に、知らない小学生から声を掛け
られた。大変人なつこいので話しながら行くと、そ
の子はこれからいわゆる有名な塾に行くのだとい
う。

このように最近は高、中、小学生もすさまじいほ

ど、勉強することに時間をとるらしい。どういう方
向に進むという目安もはつきりしない時期だから、
その勉強は基礎的なものではないか、と思うけれど
も、その子に聞いたことによるとそうではなくて、
学校ですることとは全然程度の違うむずかしいこと
を習いにいく。それを「勉強」というらしいこと
や、遠くからくる子に便利なように、その塾の近く

には、熱いお湯のそなわったインスタント食品屋が

あつて、そこで自分でお湯をそいでできたものをたべ腹ごしらえをしてから行くことなど、驚くことばかりであった。それは驚きであると同時に、これ

からの世の中を考えるとき心配につながつている。

このように総てが変つてきている中に住んでいる幼児であるから当然影響を受けている。例えば

「靴がなくなつたの」

「どこに脱いでおいたの？　？　？」

いろいろ聞いてみると、それに対してもうこい

返事をするよりも

「いいよ、また買うから。買ってもらうから」

と、すぐあきらめムードになつてしまつ。

多分この報告を聞いた母親も、一応の文句は言うけれども、探しに出掛けるよりは、文句を言つて気分が治まつたら「今度は大事にするのよ」といつてすぐ買って与える方の道をとるに違ひない。

子どもは文句を言われるひとときを過してしまえ

ば結果的には一つも困ることはない。

塾に通うことといふ、なくした物を探さないことといふ、今の世の中は結果がよければそれでいい、というあたりに問題を含んでいる。

そのときの結果はよくて、ぼろを出さないですませられたことも、矢張りそれが身についたものでないと、いつかは崩れるものだという事実もたくさんに経験している。だから雰囲気的に感じとらせていこう、というような長い目で……というやり方は今どきはやらない、ということは知つていてるけれども、これが大切なことだという気持ちはいつになつても変わらない。

そこで、"おばあちゃん"という立場になつたとき、一つの試みをしてみようと思つた。「ものごとに感じる、なにかを感じとることができの人間になつてほしい」その手段として、抱いて庭に出たりあやすときなど、いつもそのときの状況とか状態、私が思つたこと、感じたことなど、全く思いつ

くままのことばにメロディをつけて歌うことにした。例えば、

「ひーでちやんはいい子ちゃん、
お花を見ては にーこにこ
お空を見ても にーこにこ……………」

いた楽譜を開いて、絵を見て思いつくままに歌を作つて歌い出す。メロディも全く思いついたままの音もリズムもみんな即興的に思いついたままの面白い。例えば「おにじっこ」のうたの頁に鬼のお面が書いてある。

いつ迄続くか分らないように、目に入るものを次々と材料にし、メロディも全くのどの趣くま、転

調もあるし、変調もあつたりして、ときには自分でおかしくなつてしまふようなものだけれども、そ

ういう雰囲気に置いた。当然抱いて庭に出たりする

ときが多いので花等をとり上げる事が多い。暫くし

てよちよち歩きができるようになつた頃。葉っぱの中

に顔を埋めて、「におい、におい」というようなことを言うようになった。

(彼の頭の中では鬼と桃太郎が結びついて思い出されたが、とっさに金太郎と間違えてしまった)

それがすむのを待つて、弟が今度はピアノを叩き出す。矢張り自分が好きな絵のところを出す。

その後弟ができて三、四歳になつた頃、私を喜こ

ばすような行動を見せてくれた。それは、私がピア

ノに向かつていると、狭い家のことなので、すぐとんでくる。そして私をどかせてお気に入りの絵のつ

「マシュマロ ぱわばわ あつたかい
たべたら ぶわぶわ あつたかい
そーしてなくなつたら おわりです」

(彼も雲の絵が書いてあるのをマシュマロと間違

えてしまった)

こうして出てくることばは、「何故か」とか「どうしてなのか」という疑問で始まって、自分なりの答え、理由づけて終止する形が大変多い。

年齢が小さいときは多くの子どもたちこういう状態が見受けられると思うので、特別な持つていき方をしたから、とばかりは言えないとは思うけれど、矢張りそういう働きかけをしたことは影響があるようと思われる。それは現在でも続いて、私が呼び掛けや簡単な話しのとき、メロディックに声を掛けると、同じように答が返ってくるので楽しい。

こういった時期は余り長くは続かないものなのでもうじきに聞かれなくなると思われるから、私にとっては貴重なこの体験を書いておく時だと思って、或る音楽振興会の「音楽は人間を作る」という題名の作文募集に応募し、今迄の自分の音楽経験によつて得たものと、孫達との経験を書いてみた。

その批評に、「非常によいテーマをつかんでいた」

とか、「教育上重要な問題なので、教えられるところも少くなかった。」というように評して頂いたが、さすが村田武雄先生、「もう一段とポイントを深くつかんで……」とも評された。私がそこで、さすがは経験の深い先生、と思ったことは、私が孫に試みたことは、はつきりとした目標を立て、それに向つて夢中になつて取り組んだことではない。結果をこうなるようにしよう。と思ったわけではない。「そういう雰囲気の中に置くことがよい。」と思ったから少しだけ機会を多く作つた。というにほかならない。だから字で表現するとなお更突込みの少なさが感じられる。私自身も何となく物足りなく思つていたことであつたそれを、ちゃんと読み取られた先生の鋭さに感じ入つたのである。

この「いい雰囲気で……」というのは、全く結果主義に反発する私の主張にほかならない。

そうするうちに上の子は幼なさがぬけ切らない一年生になった。入学式のときついて行ってみると、

出す声の大きさ、語調、友達に対する態度等々、すべて他の多くの同級生よりは弟的な感じ。そこで思い出したのは、「理想的に、と思って育てていましてたが、外に出したときに慌てましたよ……」といわれた○○先生の言葉であった。ここではその良し悪しはさておくこととする。

五月頃の日曜日に授業参観があつた。自分が親という立場のときを振り返つてみると、そのときは全く自分の子供の様子だけを凝視してしまって不満いっぱいになる。周囲の事は目に入らないために、そのあと一、三日は自分でも分るようになつたのではない、これなら見ない方が精神衛生上よかつたのではないかしら、と思つたりした。でも、親としてはそうな

のかと思うけれど、今度は立場が違うので、「自分がどういう見方をするものか」、「周りの人達はどういう態度なのか」というあたりに焦点を当てて見てみようついて行つた。

上級生になると変化するかも知れないが、一年生

は、見にきてくれることがうれしくてたまらないいらしく、知つたか振りに施設のことなど説明してくれる。私は先ずそこで、いやがられないことにホッとする。

授業は型のようく展開したが、馴れてない一年生に余り負担にならない程度の進み方の苦労や、物道具等の出し入れに相当の個人差があるのを見て、先生の用意、配慮等が大変であることが感じられた。子供達は勝手に反論したり、違う意見を無秩序に言つたり、まぜかえしたり、というわけで、その雰囲気は大変に以前とは違う。教師として「変に応ずる」、「機をみて指導する」ことの必要を見せられる。

また理科の時間は「校庭にいる虫」というテーマで展開された。

子供達は一応話を聞き、入物を持つたりして机から開放された喜びも加わって嬉々として庭中探し回つてゐる。

そこで大人の側を観察すると、子供のところへわざわざ出でていって「もうつかまえたか」「何を見つけたか」「ここにいるわよ」「あつちにいたからとて上げる」等のことを言いながら子供を連れて行ってしまう。「虫を見つけられなかつたら困る」というだけのことで、そこへいく迄の過程はどうでもよいからと、いうわけで自分が先頭になつて、他の子供や先生のいるところから離れたところへつれて行つてしまふのである。そういう傾向は、おばあちゃん、また、学校の先生のように仕事を持つた母親、とても若そうな母親に多く見受けられた。

おばあちゃんは自分の孫に……、何となく分るけれど「困る。」

教師という立場の母親が手を出すことはもつと「困る」、先生自身が結果ばかり尊重しているということにはかならないと思えるからである。

若い母親も、そうすることがどうしたことなのか

考えてもみない、という点では同じように困ることである。こうして、いつて自分の手に負えなくなつたら、それが矢張り塾にやることにつながつていて思えるからである。

その手伝つて、いるのを止めない先生も困る。先生という立場から、矢張り親のとるべき正しい態度といふものを上手に教えなければならない時期になつてゐると思うからである。

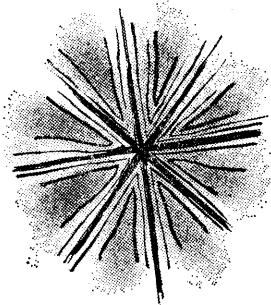
一年生の孫は入物にだんご虫をみんなと同じよう二、三匹とつてはしゃいでいたが、そのおばあちゃんは、おじやま虫をみつけて考えていた。

なぜ見ていてやれないのか、一人で活動させてやれないのか、結果だけではなく、見つけられなかつたその経験をあとで生かすように計らつてやる心づかいをしてほしいものだ、と。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

(29) 金子薰園

近代短歌に現われた子ども (十四)



大塚 雅彦

彼は中学時代から文学を好み「少年園」「少年文庫」等に文章を投稿していたが、明治二十六年十月、落合直文の浅香社を訪ね入門した。三十年、雑誌「新声」の和歌欄を担当し、またその編集を才であった。

薰園は本名雄太郎、代言人武山助雄の子として明治九年（一八七六）東京・神田で生まれたが、外祖父に養わされて金子姓となつた。補充中学校（後の府立四中）に入り途中で東京府尋常中学校（後の府立一中）に転じたが、病氣のため中退した。その後の職歴としては新潮社に長く勤め、昭和十八年に調査部長を退職している。昭和二十三年、日本芸術院会員に選ばれた。同二十六年三月逝去、七十六

助けた。三十五年に尾上柴舟と共に選の『叙景詩』を刊行し、新詩社の浪漫派歌風に対し叙景歌運動を展開した。三十六年には「白菊会」を起し、岡稲里・平井晚

村・田波御白・吉植愛剣（庄亮）・土岐湖友（哀果すなわち善麿）らを擁し育てた。三十七年「新潮」が創刊されるや、和歌欄を担当、その後長く同社との関係が出来た。三十八年「短歌研究会」を起し、大正七年十月、その機関誌「光」を創刊した。昭和初期には自由律へと移

つたが、晩年は定型に復帰した。

彼の歌風は清新な叙景歌から、絵画的な嗜好を反映して耽美的、浪漫的となったり、自然主義の隆盛と共に現実的となったり、時期によって変化はあるが、「早くから清楚典雅な歌風を示し」「一言にして叙景的で温雅といふに尽きる」（桜楓社版『和歌文学講座』第8巻、「近代の歌人」I所収、平野宣紀「金子薰園」（昭44・4）といえよう。歌集は世評高かつた処女歌集『片われ月』（明治34）を始め、最後の『朝蜩』（昭18）に至るまで合計十二冊あり、その他に数冊の自選歌集がある。歌文集

もある。『金子薰園全集』（大正14）もあるが、もとよりその後の作品は収めていない。その他、数多くの短歌入門書や歌文啓蒙書の著作がある。

①花かざす島の少女が黒髪をましろき衣をなぶる春風

②うら若き村医の妻が眼病む子の手をひきいつる小春の戸かな

③いつまでも病児の顔の目の前の枯草路かくこうじゆにちらつけるかな

①は歌集『小詩国』（明治37）所収。旅行先での属目

の歌ででもあるうか？「少女が」は此の場合「少女の」だろう。当時としてはいかにも新鮮な詠風である。この歌集の成立について薰園は「絵画に対する嗜好が作の中に著しく加はって来た」と述べているが、花をかざす島の少女の黒髪と白衣とが春風になぶられている光景は、水彩画の「おもむき」がある。②は歌集『伶人』（明治39）所収だが題材が珍らしい。眼病の子ども（患者らしい）を村医の妻が手をひいて戸口を出たという光景だが、「小春の戸」というあたりはいかにも薰園らしく、「ふる

さとの村医の妻のつましき櫛巻などもなつかしきかな」（『一握の砂』）の啄木の作品などと違った特色を示している。③は歌集『山河』（明治44）所収。道を歩いて行くと、病児の顔がいつまでも眼前の枯草道にちらつくというのである。この歌の前に続く作品群を見ると、この病児というのは、電車の中でいま見た母に抱かれた発育不良の子どもらしく、それが強く印象にのこったのであろう。

(30) 尾上柴舟

柴舟しばふも、明治九年、津山藩士北郷家の子として岡山県津山町（現津山市）に生まれ、同藩士尾上勁の養子となつた。本名八郎である。養父は裁判所書記や判事をつとめた人である。明治二十三年上京、旧制一高を経て同二十四年、東京帝大国文科卒業、東京女高師教授を長く勤め、女子学習院や早大でも教鞭をとつた。「平安朝の歌と草仮名の研究」で文学博士となる。昭和十二年、帝国芸術院（後の日本芸術院）会員に選ばれた。国文学者・

歌学者であると共に、仮名の名手で「行成以後第一の人」と称された。晩年は中国小説の研究、翻訳にもつとめた。昭和二十四年から没年まで「歌会始」の選者を統けた。同三十二年、流感のため永眠、八十二才である。短歌は始め桂園派の大口鯛二に学び、明治二十八年一高入学と共に、教授の落合直文の門（浅香社）に入る。同三十一年、久保猪之吉らと「いかづち会」を起す。三十五年、同門の金子薰園と共に前述の合同歌集『叙景詩』を刊行して叙景歌運動を進め、三十八年には前田夕暮・若山牧水・正富汪洋・有本芳水・三木露風らが柴舟を中心にして「車前草社」を結成、詠草は「新声」等に発表された。大正三年四月、水甕社を結成、歌誌「水甕」を主宰して歿年に及んだ（同誌は現在も継続している）。歌集は前述の『叙景詩』を始め、「銀鉛」（明治37）・『静夜』（明治40）・『永日』（明治42）等から遺歌集『ひとつ火』（昭33・9）に至るまで十五冊ある（詩歌集や歌文集を含む）。なお、『ハイネの詩』（明治34）のような訳詩集もある。『尾上柴舟全詩歌集』（昭43）も出

てゐる。

歌風は『叙景詩』時代の清新な自然詠、『銀鈴』時代

の西洋詩の影響、『静夜』『永日』の頃からの内省的、思索的傾向や自然主義の影響等、そのときどきの詠風を示しているが、概して歌柄は穩健で静謐、典雅であり、国文学的教養に裏うちされている。しかし、「創作」一の八号（明治43・10）に発表された彼の「短歌滅亡私論」は歌壇にショックを与えた。なお、歌学・国文学関係の著作も『梨壺の五歌仙』（明治35）、『清少納言』（同）、『日本文学新史』（大正3）、『短歌新講』（大正4）、『歌と草仮名』（大正14）、『評訳新古今和歌集』（昭27）等、すこぶる多い。中国小説の訳本『快心篇』（昭19～23）等もある。

①なつかしきおもひ湧く日は市に立ちもの乞ふ子らも
しる人のこと
②霜白き村の板橋なりに曲げてゆすりしわが幼どち
③白々とわが子の骨の見えて来ぬあな朝の日のあきら
なるかな

④ことさらにつくる笑顔もしばしにてわらひくづるる

わが少女ども

①は柴舟作品でも最も有名なもので、教科書にも多く採用されている。『静夜』最初の一首。「漫に何となく、人懐しきに耐へやらぬ日は、街に行きあふ乞食さへ知己の様な気がする云々」と作者自身、注釈している。「子ら」というのは「人の子」というように大人、人間一般を指すのかもしれないが、「水甕」を主宰した加藤将之は「街頭に立つて物乞いをしている子供」（傍点大塚）と解している（加藤『鑑賞尾上柴舟の秀歌』昭49・12）。②は歌集『空の色』（大正8）所収。「どち」は同類をいう語で仲間を指す。村童たちの腕白ぶりが眼に見える。③も同書所収。「生れしのみの子を失ひて十首」の中の一首で、「火葬場にて」の脚註がある。「あな」は「ああ」（嗟、噫）である。大正五年十二月、作者夫妻に珍らしく男児が出産したが翌日永眠した（以後、実子に恵まれなかつた。嗣子尾上兼英氏—東大教授、中国文学学者は養子である）。④は歌集『朝ぐもり』（大正14）所収。

「少女」という題の中の一首。次に「おどろきの眼みはりてわが少女世になき事を聞くすがたする」という歌もあり、女高師での教え子たちの姿態をうたつたものか？ちなみに柴舟は教室において駄洒落の連発であったといふ（加藤、前掲書）。天成のユーモリストだったらしく、楽しい授業であつたらしい。

(31) 前田夕暮

夕暮は本名洋造、明治十六年（一八八三）、神奈川県大住郡（後の中郡）大根村（現秦野市）大字南矢名の農家に生まれた。中郡中学校を神経衰弱のため中退。その後各地を放浪、三十七年上京、尾上柴舟の門に入り、国語伝習所や二松学舎に学ぶ。職業としては父の經營していた山林業を継ぐ。昭和二十六年、糖尿病と胸部疾患のため死去、六十九才であった。彼は少年の頃「文庫」「明星」を読み文学に志した。前述の如く上京して、柴舟を中心とする「車前草社」が結成されるや同人となる。明治三十九年「白日社」を創立、翌年歌誌「向日葵」を発

刊したが二号で終る。その後「文章世界」や「秀才文壇」等に関係したが、同四十四年「詩歌」を創刊。その後、一時作歌を休止したが、大正十三年「日光」創刊に参加。昭和三年「詩歌」を復活、同四年自由律短歌に移行したが、同十八年定型に復帰した。

彼は「明星」の浪漫主義に対抗して出発したが、歌集

『収穫』（明治43）の頃より自然主義歌風を確立し「牧水・夕暮時代」と併称された。彼の作品は絵画的な色彩感を中心とする感覺の鋭さに特色がある。生涯、何度も歌風の転換をしたが、「未完成から未完成への道を歩いた歌人」「老成を拒否しつづけたその歌人生涯は近代歌人の中に類型を見ない」（『日本近代文学大事典』・木俣修執筆）といわれる。歌集は『収穫』を始め、最後の『夕暮遺歌集』（昭26）に至るまで主なものが十四冊あり、選集も多い。また彼は隨筆にも優れ、「綠草心理」（大正14）を始め九冊の隨筆集があり、数冊の歌論集もある。『前田夕暮全集』全五卷（昭47～48）や、『前田夕暮全歌集』（昭45）、『定本前田夕暮短歌作品集』（昭38）等もある。

なお、「詩歌」は戦時中に休刊したが、昭和二十一年復刊し、現在、嗣子の前田透氏（歌人、明星大教授）の主宰で継続されている。

①子供らは土手にひそまり空を見るまた一人きてならびけるかも

②ぱつとひとり光明界にをどりいでしあから裸児こゑたかくなく

③色あかき春の帽子をかぶりたる我が子いだきて家い

でにけり

④川床にわがねてあればまはだかの童子きたりて顔またぎすぐ

⑤赤い風車の下の、敏感な検温器のそばで、わが児さよりのやうに寝てゐる

①は歌集『深林』（大正5）所収。「冬日公園」一連の中の歌。この歌集は「前期前田夕暮の到達点と言われる」（前田透『評伝前田夕暮』昭54・5）が、抄出歌はいかにも整った印象的な作品である。②も同書所収で、「大正三年九月十六日、長男透生る」の詞書がある。生

れ出た赤ん坊の裸児を「光明界に躍り出た」と喻えるあたり、いかにも夕暮らしい調べである。③は歌集『原生林』（大正14）所収。「草と樹と土」一連中の一首。大正八年作だから此の「我が子」は前年に生まれた長女妙子か。一、二句いかにも気分のよい歌だ。④は歌集『虹』（昭3）所収。八月初旬に長男透や北原白秋等数名と共に塩原に遊んだ折の作中の一首、「塩の湯」の脚註がある。村童の天衣無縫ぶりが微笑を誘う。この頃作者はしばしば裸かの子どもをうたつており、大正十三年作に「蓮のはなもてる裸かの童子ゐて炎天の道にわれ等を見たり」「まはだかの童女裸かの子を負いて川わたりをり膽ぬらしつつ」等がある。⑤は歌集『青檸は歌ふ』（昭15）所収。口語自由律時代の作品である。「南湖院（1）」一連中の一首で、「昭和七年七月、わが子妙子、南湖院入院」の詞書がある。妙子は後に昭和十一年、五年の闘病の結果自宅に於て十九才で夭折する。南湖院というのは當時茅ヶ崎海岸にあった東洋一の結核専門の病院であり、多くの文学者がここに入院した（歌誌「樹木」昭53

1月号～8月号所収、拙稿「南湖院物語」参照)。この歌、入院中の愛児を歌うのにも「赤い風車」や「さより」(針魚ともいい、体は青緑色の細長い近海魚)を用い、感覚的な発想はいかにも夕暮作品らしい。

(32) 太田水穂

水穂は本名貞一、明治九年、長野県東筑摩郡原新田村(後に広丘村、現塩尻市)の農家に生まれた。明治三十一年、長野師範卒業、一、二の小学校勤務を経て、長野県立松本高女教諭となる。四十一年辞任して上京、日本歯科医専理科の教授となる。翌年、有賀みつ(後の歌人四賀光子)と結婚。歌人としての生涯を送り昭和二十三年、芸術院会員となる。同三十年の元旦に逝去、八十才であった。

彼は師範在学中から文学に親しみ、詩を「文学界」等に投稿、明治三十二年、窪田空穂らと新派和歌の同好会「この花会」を結成、四十年信濃毎日新聞の歌壇選者となり、上京後は小説や評論、随筆等にも活躍した。大正

四年七月歌誌「潮音」を創刊主宰し、歿年に及んだ(同誌は嗣子の太田青丘博士——本名兵三郎、中国文学者、法政大名誉教授、養子であるが水穂の甥にあたる——が主宰して現在も継続している)。歌集は『つゆ草』(明治35)を始め遺歌集の『老蘇の森』(昭30)に至るまで十冊ある。その歌風は自然主義や写生主義ときびしく対立し、また、俳諧的手法や中世象徴歌風などをとり入れて、日本の象徴を強く重んじた。万有愛の理念を掲げたこともよく知られている。歌論書として『短歌立言』(大10)、『花鳥余論』(昭22)等がある。古典文学研究にも業績多く『新釈伊勢物語』(明治45)や『芭蕉俳諧の根本問題』(大正15)、『芭蕉連句の根本解説』(昭5)等があり、大正九年頃から諸学者たちと「芭蕉俳句研究会」を開き、その同人達との合著も数冊あり、古事記研究の『神々の夜明』(昭15)もある。『日本和歌史論中世篇』(昭24)、『同上代篇』(昭29)は名著といわれる。『太田水穂全集』全十巻(昭32～34)も刊行されている。

①父(ちち)母(はは)に手をば引かれてうれしきか此の子は足をあげ

つつぞゆく

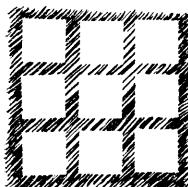
② 棕鳥のあらしの如く桑の木の熟れ実にたかる青わら
べたち

③ 履^{はき}きて来て忘れてゆきし六つの子の赤緒の木履若草
の庭

な大群の動きをするのである。感覚的な把握のにじんで
いる作品である。③は歌集『流鶯』(昭22)所収。「孫女」
の脚註がある。淡淡とうたつてゐるが、幼い孫娘の生態
が眼に見えるようで、置き忘られた赤い鼻緒の木履も可
憐である。

①は歌集『雲鳥』(大正11)所収。大正七年作。父母
に手をひかれ、派手に足をあげつつ歩いてゆく子供への
愛憐の情がじみ出ており、「ほほえましい街頭スナッ
プ」(太田青丘『太田水穂』昭36・6)である。前々年
の大正五年に水穂は亡兄の第三子をひきとつて養子にし
たので、幼児を想う情が深かつたのであろう。②は歌集
『冬菜』(昭2)所収。「青わらべ」は年若く未熟な童を
指す。桑の実の紅く熟したもの(私の郷里ではどどめと
いつた。唇のまわりを真っ赤に染めながらこれを食べた
幼時を、なつかしく私は想い出す)にたかっている幼童
たちを「棕鳥のあらしの如く」と形容したのは絶妙だ。

この田舎の子ども達に親しい鳥の集団の生態も、農村出
身の筆者にはなつかしい限りだ。ワッと襲つてくるよう



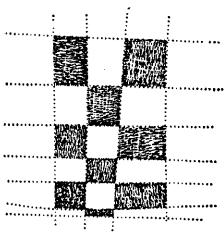
(お茶の水女子大学)

「ぼくり」という擬音めいた発音も、歌柄を愛すべきも
のにしていよう。石川啄木の「わかれをれば妹いとしも
赤き緒の下駄など欲しとわめく子なりし」(『一握の砂』)
なども思い出される。なお、水穂の孫をうたつものに
「坂下にむれ遊びる童べらの声のなかなるわが孫のこ
ゑ」(『老蘇の森』)等がある。

ニュージーランドにおける

就学前教育の歴史ならびに現状（三）

松川由紀子



二 一九二〇年、三〇年代の

フリーキンダーガルテン

この章では、一九二〇年、三〇年代のフリーキンダー
ガルテン運動の発展について述べたいと思う。

一九二〇年、ニュージーランドにおいては、既述した
四つの都市（ダニーデン、クライストチャーチ、ウェリ
ントン、オークランド）に数ヵ所ずつ、合計十四ヵ所の

フリーキンダーガルテンが存在していた。一九二〇年代
には、他のいくつかの町（インヴァーカーギル、ハミル
トン、ヘイスティングズ、ロウワー・ハット）にもフリーキ
ンダーガルテン運動は波及し、わずかに設立されてい
った。一九二六年には、ニュージーランド・フリーキン
ダーガルテン連盟が結成されたが、具体的な活動はほと
んど展開されなかつたようである。一九二〇年代末に
は、全国で約二十數ヵ所のフリーキンダーガルテンがみ

られ、三〇年代末には、約三十数カ所となつた⁽¹⁸⁾。

(1) キンダーガルテン運動の発展

この時期のフリー・キンダーガルテンは量的には非常に

わずかなものであるが、その前の三十年間、すなわち、この国にフリー・キンダーガルテンが創設されて運動の基礎が確立されていく時期（一八八九年から一九一九年までの三十年間）に蒔かれた運動の種は少しづつ芽を出し、キンダーガルテンの数は増加していった。一九二〇年、三〇年代のキンダーガルテンは、量的にはわずかな增加にすぎないが、運動の普及、発展にとつては非常に重要な要素を含んでいた。結論的に言うならば、それまでは、ごく一部の社会的関心に目ざめていた人々が運動をになつていたが、それが次第に、一般市民にもキンダーガルテンの問題を提起し、その支持の輪を少しづつ広げ、さらに、キンダーガルテンに子どもを送る両親たちの積極的な関心を呼び起こし、キンダーガルテンの管理、運営をにぎる地区委員会は両親たちによつて占めら

れる割合が急増し、キンダーガルテンは、保護を必要とする子どもたちのために設けられるものから、ごく一般の子どもたちにとって必要なものと考えられるようになつていったのである。

一九二〇年、三〇年代は、政治的にも経済的にも不安定な時代で、特に三〇年代前半は世界大恐慌の影響を受けて、非常にきびしい状況がみられた。一九三五年に政権の座についた労働党は、西側世界に先がけて総合的な社会保障制度を着々と作り上げていったのであるが、すでにこの国では、十九世紀後半から少しづつ児童保護政策は展開されていた⁽¹⁹⁾。そして、一九二五年には、児童福祉法（内容的には児童保護が主たる関心であった）が制定され、児童福祉に対する国家責任が確認され、教育省内に児童福祉局が創設された。さらに翌二六年には、家族手当法が制定され、児童福祉を要保護児童から児童全体を対象とするものへ、その方向づけがより明確化されていった。

国家が児童保護、児童福祉に対して責任をもつ、とい

う考え方が確認されていく時、当然ながら、（教育とと

もに）貧しい子どもたちの必要に応じてその運動が発生、展開していたフリーキンダーガルテンもまた、この考え方へ影響されることになる。特にウェーリントンにおいては、一九二四年、財政が熟した時点での政府がキンダーガルテンの全責任を引き受けることについての議論が多くなされ、協会関係者、視学長ならびに教育大臣などがその論議にかかわった⁽²⁾。しかし、キンダーガルテンを政府が引き受け、すべての公立小学校にキンダーガルテンを付設するには、莫大な費用がかかることであったので、それは不可能なことであった。それどころか、幼児ひとりあたりの年額助成金（均等割）が、三ポンド二シリング六ペニスから四ポンドに引き上げられていたのだが（一九二四年）、不況時の一九三一年には、すっかり廃止されてしまった⁽²⁾。そして、一九三五年、助成金は再交付されることになり、助成総額も順次増大されていったけれども、その総額は全体的には低いものであつたために、現実には、ごくわずかな助成にとどまつてい

た⁽²⁾。

こうしたきびしいなかで、フリーキンダーガルテン運動は、ゆっくりとした歩みではあつたが、四都市を中心にして着実に展開していく、地方の小さな町にもわずかながら波及していった。その原動力は、運動をになう人々の善意であった。そして、それは地域の両親たちの関心を次第に呼び起こしていった。

なお、当時のキンダーガルテン教師の養成は、四都市にあつた四カ所の養成所でなされていた。養成所は、独自の建物があつたわけではなく、協会内のフリーキンダーガルテンのひとつがそれを兼ねていた。学科目ならびにその時間数は養成所ごとに異なつていて、政府からは何ら援助もなければ統制もなかつた。養成所独自に試験をし、独自の免許状を交付していた。養成プログラムの中心は、協会内のキンダーガルテンにおいてなされる実習（毎日午前中になされた）で、事实上、学生たちはキンダーガルテン教師の助力者の役割をしていた（なお、学生たちは養成費用を支払っていた）。学生たちは、午

後は養成所で講義を受けたり、専門学校の授業に出席したりした。当時の養成所には所長がひとりいただけであった（何人かの非常勤講師はいたが）。所長は、協会によって雇用され、養成面とともに協会内のキンダーガルテンの指導、監督にも責任を負っていたが、給与は低いものであった。多くのキンダーガルテンが賃借建物で開かれていたので、使用後はその都度、遊具や備品類を片づけていた（そして、朝、それらを取り出して設置していた）。そのため、学生たちは、すでに午後には身体的に疲労していた。このように、教師養成は困難な状況のなかでなされていたので、養成を受ける学生の数もあまり多くはなかった。

では、次に、この時期の各地の具体的な運動の展開をみてみよう。

(2) 各地のキンダーガルテン運動

ダニーデンにおいては、一九二二年、二十四年に、第一四、第五番目のキンダーガルテンが設立された⁽²⁾。一九

二六年には、一九〇八年に設立されていたキンダーガルテンが新たにハドソンキンダーガルテンとして専用園舎にて開始されたが、不況時には一時的に閉鎖された。

クライストチャーチにおいては、一九二三年には五カ所のキンダーガルテンがあった。この年、サッカーフ夫人が協会長に、ハドフィールド夫人が名譽会計係になり、さらに一ヵ所、キンダーガルテンが開設された。協会ならばに地区委員会が資金集めの活動を積極的に展開していだために、ここでは、不況時にも閉園されるところはなかった。しかし、養成所卒業生の求職はむつかしく、何人かは私的なキンダーガルテンを開き、不況時の学齢引き下げに伴つて（一時的に）小学校から縛め出された、五歳児の世話をしていたという。そして、一九三四年、三九年には、第七、第八番目のキンダーガルテンが開始された。また、一九三六年には、ハル嬢が、二十五年間在職の後、養成所長ならびに監督者を退職し、（前年、カーネギー奨学金を得て渡米していた） ウィルキー嬢 (R. Wilkie) が、その後任となつた。ウィルキー嬢

は、養成面では、学生たちの手づくり遊具製作を積極的に指導したり、毎年、病院や盲学校の見学を実施したりした。さらに、女学校の生徒がキンダーガルテンを見学する機会をつくったり、母親クラブの育成に務めたり、最初のキンダーガルテン関係年代史を編集、出版したりした。

ウェーリントンにおいては、一九二一年には五カ所のキンダーガルテンがあつた。二四年にはギル夫人が（十五年間在任の後）会長を辞任し、三四年にドクター夫人がそれに就任するまで、会長はあわただしく三回も交替したが、ふつう、協会の仕事は、有産階層のパトロンとともに多くの者が長期間に渡り、無報酬でなしていた。一九二〇年代の年次報告書には、「キンダーガルテンはある一定の目的を満たすためにエネルギーを用いる習慣を子どもたちに教え、『有益な生活』の基礎を築くことを目的にしている」と記されている。それは、「喜びのための遊びの理想は、次第に、労働のための労働への願いに変形される」というプロテスタント倫理に基づいていた。

たキンダーガルテン哲学であった。また、協会は、両親教育を重視し、一九二九年までに母親クラブをすべてのキンダーガルテンにつくり、以後、一九三〇年代は母親教育に積極的に取り組んだ。母親クラブは、資金集めを目的とするものではなかつたが、不況時には資金集めの活動をしてキンダーガルテンの運営を援助した。なお、不況時にはキンダーガルテンの教師は自ら減給し、無給で働く養成所卒業生もみられた。

一九三九年には、協会は、両親や教師たちを対象にして『子どもたちとともに生きよう』という小冊子を発行した⁽⁴⁾。この小冊子の名称は、キンダーガルテンの創始者として有名な、ドイツ人のフレーベルが、普及運動のなかで好んで使用した標語として、よく知られているものである。一九三〇年代末には、ウェーリントンにはわずか九カ所のキンダーガルテンがあつたのであるが、この小冊子は、その頃の児童心理学、進歩主義教育学の研究をとりいれた良心的な編集で、両親や教師たちにとって有益な内容であったのではないかと思われる。イギリス

の進歩主義教育学者のスザン・アイザックス (Susan Isaacs, 1885-1948) が、一九三七年に、ニュージーランド

ドを講演旅行で訪ね、子どもたちの自発的な活動が、発達上、いかに重要なものであるかを説いたのであるが、この小冊子は、その原理に基づいて、家庭、親子関係はどうあるべきかをわかりやすく話し、両親や教師は子どもたちをいかに理解すればよいのかについて具体的に説明し、さらに、子どもの遊びの重要性を説いている（なお、ここにはアイザックスの文章もひとつ掲載されている）。そこには、幼児にとって友だちとの遊びは、発達上、欠かせないもので、そのためキンダーガルテンはすべての幼児にとって必要なものであることが記されている。しかし、現実にはキンダーガルテンは非常に少なく、また、幼児の自発活動重視の教育はまだほとんどみられず、多くは教師指導型の形式的なプログラムがなされてきた。とはいっても、この小冊子は、ウェリントンのみならず、この国のキンダーガルテン運動にとって重要な役割を果たしたであろうし、（次の時代への）貴重な財

産になつたであろうと思われる。

オークランドにおいては、一九二五年、二八年にそれぞれ二ヵ所のキンダーガルテンが設立され、合計七ヵ所になり、不況時の後、一九三六年以降は、定期的に増設されたようだ。一九二五年には、オークランド・フリーキンダーガルテン協会内部で養成、育成されたコールグローブ嬢 (G.M. Colegrove) が、養成所長ならびに監督者に就いた。なお、コールグローブ嬢は、一九三五年、三六年に、カーネギー奨学金を得て渡米した。

インヴァーカーギルにおいては、一九二一年に、婦人委員会ならびに（男性）助言委員会が設置され、多くの人々からよせられた寄付をもとに土地ならびに家屋を購入、改造し、最初のキンダーガルテンが設立された。教師の給与が非常に低かったために、家屋の後部は宿舎として残されていた（これは後に「子どもの家」として知られた）。このキンダーガルテンは、毎日朝九時から午後二時まで開園されていて、子どもたちは昼食を持参していた。地元住民ならびに地区委員会の努力の結果、一

九二六年、二七年には、第二、第三番目のキンダーガルテンが設置された。一九三二年には第四番目のキンダーガルテンが設置されたが、大通りに面していて危険であったために、教育省の助成が認められず、わずか一年で閉鎖された。一九三三年には、不況時であつたにもかかわらず、クー地区の親たちが地区委員会をつくり、熱心に資金集めをし、ついに一九三六年には、全く政府の財政援助を受けないで専用園舎を建てた。また、この年にはすべてのキンダーガルテンに母親クラブが形成されたが、すでに親たちが地区委員会の中心的なメンバーになつていた。さらに、一九三八年には、専用園舎をもつたキンダーガルテンが開園された。

ハミルトンにおいては、一九二一年に最初のフリーキンダーガルテンが開設され、教師養成が開始された。しかし、委員会の努力にもかかわらず、一九三三年には閉鎖されてしまった。

ヘイスティングズにおいては、一九二八年に公の会議がもたれ、翌年に最初のキンダーガルテン（三十八名の

幼児）が設立された。母親クラブは、イス、テーブル代として三ポンド寄付したという。三三年には、幼児は六十四名に増加した。なお、当時の教師の給与は年額一二四ポンド、助力者は二〇ポンドならびに一〇ポンドであつた。このキンダーガルテンは賃借建物であつたために、以後、場所はあちこちに移動した。

ロウワー・ハットにおいては、一九二八年に最初のフリー・キンダーガルテンが開園された。統いて、地区委員会が設立され、第二番目のフリー・キンダーガルテンが開設された。このふたつのキンダーガルテンの母親クラブは互いに協力して、よく活動をしたらしい。

なお、ブレンハイムにおいては、すでに一九二一年からキンダーガルテン設立の動きがあつたが、適切な建物が得られず、ようやく一九三〇年に、教会ホールにてセンターが開設された。しかし、不況時の政府援助廃止に伴い、センターは閉鎖され、三九年には再開の望みもみられたが、戦争勃発のために計画は延期されてしまつた。

以上、一九二〇年、三〇年代の各地のフリーキンダーガルテン運動の具体的な展開をみてきた。フリーキンダーガルテンを設立しようとする時には、その地域が始めての場合は、まず公の会議を開き、地域の人々の支持を得なければならない。それから、委員会ないしは協会を設置する。すでに協会の活動している地域では、その援助がみられるだろう。統いて、地区委員会を設立し、場所ならびにスタッフの選定をしつつ、資金集めをしなければならない。キンダーガルテン設立の後も、資金集めの活動は手を休めることはできず、それどころか、専用園舎建設に向けて努力が続けられた。その後も、新しい地区の委員会を援助するために活動は続けられた。次第に、地区委員会の中心的なメンバーは親たちが占めるようになり、運動をになつていった。自身の子どもが卒園した後にも運動を支え続けていく者も、めずらしくはなかった。場所の確保ならびに建設問題、スタッフの確保、その給与の支払い、さらに運営の方法などは、欠してたやういふことではなかつたが、地区民の支持、援助を得なければならぬ。

獲得しつつ、親たちはそうした困難さにも粘り強く取り組んでいた。婦人たち、母親たちが運動を中心的にになつていたが、男性たちもいろいろな形で運動に参加していた（助言者として、地区委員会のメンバーとして、そして父親として）。

（山口女子大学）

註

(18) 第二次大戦前のフリーキンダーガルテンの統計は教育省にも正確なものは残されていない。ここでは、ロックハートの前掲書にみられる各地域の運動の記述を始め、いくつかの文献を参照しておおよその数をあげた。

(19) ニュージーランドの児童福祉に関する『小松隆一著『理想郷の子供たち』（論創社、一九八三年）に詳しい。

(20) Meade; op. cit., p. 116.

(21) Early Childhood Care and Education: A Report of the State Services Commission Working Group, (The Cory-Wright Report), Wellington: State Services Commission, 1980, p. 2.

(22) Meade; op. cit., p. 118.

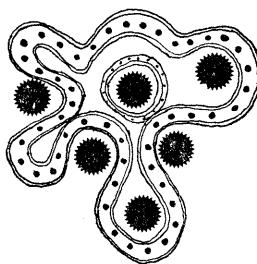
(23) 以下の記述は、特に注のない限り、ロックハートの前掲書を参考した。

(24) Meade; op. cit., p. 116.

(25) Wellington Free Kindergarten Association (ed.); Let us live with Our Children! Wellington Free Kindergarten Association, 1939. 筆者は幸運にも教育省の好意による小冊子を手に入れたが、これが筆者にとって最も重要な参考書である。

西ドイツ、マールブルクの子どもたち

美谷島 いく子



はじめに（大学街マールブルク）

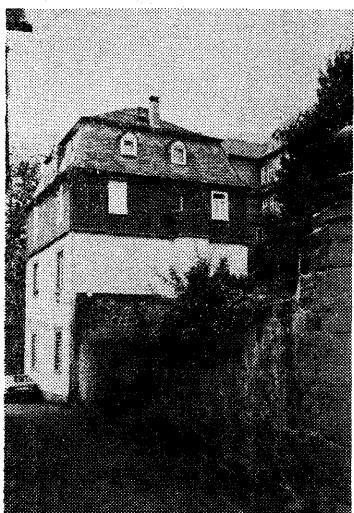
私は、一九八一年十月から一年間を一歳半の娘と共に、西ドイツヘッセン州ラーン河畔の大学街マールブルクで過した。大学は、宗教改革後、一五二七年に、諸侯フィリップ王により、世界最初の新教大学として創立された。王に因んで大学は、正式には Philips Universität Marburg と言い、先年四五〇年祭を祝った。宗教都市

でもあるマールブルクのもうひとりの顔は、低地に聳え立つ初期ゴシック様式のエリザベート教会（十三世紀）と、こんもりとした城山の頂上の、赤い砂岩のヘッセン地方伯の城館（十二世紀）である。城内は博物館になり、ルターとツヴィングリが宗教討論した（一五二九年）部屋も残っている。

マールブルクは、現在、人口わずか七万人の内、大学生が一万五千人を占め、街に大学があるというよりも、

大学の中に街がある感じである。大学の古い建物は城山一帯の旧市街に点在している。大学の図書館は、西ドイツの一の蔵書数を誇るという。

この街には、グリム兄弟や、ベーリング（血清研究で第一回ノーベル賞受賞）が学んだ。三木清も、ハイデガーの講義の名声を聞き、ここに移り住んだ。古くは修道院であったというアルテ・ユニの歴史的な壁画とシャンデリアで飾られた講堂では、グリム兄弟を記念したグリム賞の受賞式が、今年も行われた。この地方からも、グ



▲ザヴィーニ教授の家

リム童話が、名も知れぬ人々の口伝えに従つて集められた。坂の多い石畳の道を歩いていると、童話語りのおばあさんのような民族衣装を着ている老人によく出会う。

城山の中腹にある市庁舎の前では、市場^{マーケット}が開かれ、人々で賑わう。市庁舎の近くには、グリム兄弟の下宿や、

ペッティーナ塔^{トウルム}、ザヴィーニ教授（グリム兄弟の師）の家が残り、歴史を今に伝えている。グリム童話の原形は、グリム兄弟がザヴィーニ教授の子どもに送った手紙に遡ることができるという（^{ナードハック}）。市庁舎の時計塔で、鐘楼守がトランペットを吹き、雉鶏がはばたいて時を告げるのを、泉^{ブランコ}の石段に佇んで聞いてみると、一八〇年の昔のグリムの時代にいるような気がしてくる。

歴史を秘め、珠玉のように美しいマールブルクでの一年は、育児で忙しく瞬く間に過ぎた。子ども連れで行動範囲も限られ、狭い時空間より垣間見たものに過ぎないが、逆に、子どもと一緒にだからこそ体験できたこともある。そんなことも含めて、ドイツの子ども達のこと、幼稚園のこと等、記してみたい。

まず、教育制度の概略を話したい。西ドイツの幼稚園(Kindergarten)は、日本と同様に、三~六歳児を対象

とする。公立と私立(シュタイナー学校や教会付属)があり、料金は、月額60~120 DM(1 DM ≈ 100 円)位である。

他に乳児から三歳までの小さく子どもを預る保育所(Kinderkrippe)がある。又、教会付属で、一歳半以上の

幼児と遊んでくれる託児所(Kinderspiele)もある。

六歳からは、四年制の基礎学校に入学する。基礎学校が午前中まで終るので、母親が働いている鍵の子は、学校終了後を学童保育所(Kinderhort)で過す。十歳の時、ギムナジウム(九年制、卒業後大学進学)、実科学校(六年制、専門大学、専門工専進学)、基幹学校(五年制、卒業後就職につく)に進路が分れる。

子どもが、基礎学校の新学期に持つてゆくものにSchultüteがある。厚紙で作られ、三角形のとんがり帽子のような形をし、美しく飾られたSchultüteの中に、御菓子を母親に一杯入れて貰う。秋の始業式の日には、大きなSchultüteを抱え学校に向う子ども達の嬉しそうな姿が見られる。新学期の始りを、喜び祝つてやる楽しい習慣といえよう。

西ドイツでは、最近出生率が低下し子どもが減少している為に、政府から児童手当^{チルドレンズ・ペイ}の支給があることを付加したい⁽²⁾。

「Kinderspiele(託児所)」

マールブルクでの生活も三ヶ月目に入り、少し慣れてきた頃、ユニ・ゲストハウスの洗濯室で、教会付属のKinderspieleの掲示を見た。「火、木曜日の午前九時~十二時、対象児は一歳半以上」とあった。

十二月になると、日毎に空の暗さが増し根雪が降る。日も短くなり、午後四時頃には、もうすっかり暗くなってしまう。朝、零下15度位に気温が下がり、日中もほとんどそのまま、日光を見ることがない日が続く。毎日、ベランダに掛けた温度計と睨めっこで生活していたが、幼い娘を抱えて、無事冬を越せるかと不安になってしまった。日照不足なので、子どもは保健所からカルシウム

やビタミンを貰つて飲んでいる。春、夏に、好んで日光浴をするのも領ける。戸外での遊びがほとんど不可能となり、家の中ばかりで少し持て余している娘を見て、「寒い寒い！」と閉じ籠つてゐるよりも、気分転換してと思い、Kinderspiele（娘を連れて行つてみることにした。

初めての十一月十七日の日記に「リュックに代えの紙おむつと御八つを入れ、午前八時四十五分に零下15度の中、家を出る。30cm程積つた雪道なので、車の轍（わだち）や、搔き集められた雪の山で、時々バイクが進まなくなつ」とある。この寒さの中、思いきり厚着をさせた積りでも、稚い娘が凍えてしまわないかと心配で、膝の上に、娘がお気に入りのマックスとモーリツの毛布を掛けてやる。娘は、案外、寒さには平氣ではしゃいでいる。小さい木製の橇に子どもを乗せ送迎しているのも北国らしい。

Kinderspieleは、教会の一室（20畳位）で、老婦人のボランティアにより行われていた。部屋に入ると、緑色

のセーテーに大粒の琥珀のネックレスの良く似合う上品な老婦人が「お早う」と笑顔で迎えてくれた。娘の住所、氏名、年齢、親の職業、連絡先をメモする丈で、無料で快く預ってくれる。

娘は、もう、男児と一緒に、赤い自動車に乗つて遊び始めている。その日は、子どもが八人（一歳半～三歳のまだ幼稚園に行つていない子ども）に、先生である老婦人が三人だった。その中の一人は、自分の孫を連れて来ていた。先生達は、三人位ずつで、火と木曜日で交代していた。その日、子ども達は、自動者、自転車で走り回つて遊ぶ者と、机の回りで、静かに積み木、レゴ、ブロックをする者があった。子どもの自発性を重んじた自由保育である。十時に、先生が御八つの歌を歌い始め、子ども達は持参した御八つを頂く。私は、「先、帰宅し、十二時に娘が泣いているのではと心配しながら迎えに行つた。先生から「良い子でいたこと、娘が皆の前で、蝶々の歌を歌いながら踊つてみせたので、皆が笑つた」と言われ、一安心する。

そんなに充分と言える施設ではないが、そこで、にこやかに迎え入れてくれる老婦人が、何よりも魅力的だつた。彼女達の中には、二度の大戦で想像を絶するようなく、人生の終りの時期を、子どもと遊ぶことに当てており、それがとても楽しそうなのが嬉しかつた。

「Kindergarten (幼稚園)」

幼稚園の入園は、日本のように四月一斉でなく、各々が三歳の誕生日を迎えた時に、個人的にする。近くの市立幼稚園は、綴は縦割りの三・六歳児混合で、自由保育だった。広い芝生の庭があり、保育室には、絵本の棚、飯事のコーナーが設けられ、窓には、一般のドイツの家庭と同じように、季節毎の美しい飾り付けがされていた。

ドイツ人は、十一月のラテルネ、十二月の降誕祭、

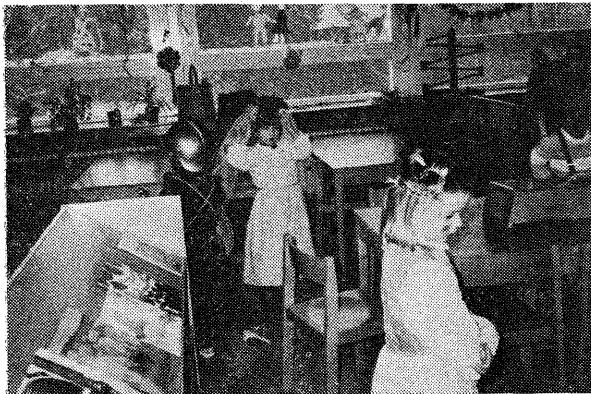
一月の謝肉祭、三（四）月の復活祭等と、季節の節目毎

の行事を大切に守つている。これらの行事は、雪と氷に閉ざされ、単調に流れがちな長い冬の時間に、リズムを付け、新しい始まりの時間を蘇らせた。非日常の世界の出現により、雪と氷の無彩色の世界に彩をそえ、日常生活を活性化する。幼稚園でも、これらの行事が重要な位置を占めている。紙数の制限上、その中から、幼稚園での謝肉祭のことを中心に述べてみたい。⁽³⁾

1月に入ると、寒い中にも春がもうそこまで来ている。日記を見ると、「二月一日午前十一時二十分、部屋の中まで久しぶりに暖い日差が射し込む。窓を開くと、娘は、ベットの上に射し込む陽光に驚き『ほら、これ見て、これ、これ、これは？』と質問し、目を細めて光と遊ぶ。七日娘が、森への散歩の途中見つけたと、可愛い万作の枝を持ち帰る。十三日氷の溶けたローン川で泳ぐ白鳥に、娘は餌を投げてやり、白鳥が食べるのを喜ぶ」この頃になると、大人も子どもも、謝肉祭の化装のことで夢中になる。

謝肉祭は、復活祭までの約四十日間に亘る精進生活の

始まる前に、仮装をし大騒ぎするカトリックの祭である。しかし、長く厳しかった暗い冬を追い出し、待ち遠しかった薔薇の花開く明るく美しい春の到来を喜ぶ土俗的風習とが重り合って、今日の祭の姿となっているとい



▲幼稚園のカーニバル

う。謝肉祭の前日は、「Rosenmontag(薔薇の花開く月曜日)」と美しい名で呼ばれてゐる。日本の節分が、豆撒きにより、冬の様々な鬼を追い出し立春を迎えるのと似ている。

その幼稚園では、謝肉祭を二月末に控え、園の二月のテーマは「メルヒヨン」で、それに従つて遊びが展開されていた。一日からの第一週目は、メルヒヨンの中の狼について話し合う。グリム童話「赤頭巾」の話をする。

赤い頭巾を描いたり製作してみる。第二、三週も、自由保育の中で、メルヒヨンに因んだお話、歌、遊び、製作が行われる。例えば、子どもの夢の中の王子様や王女様を描く、童話を話したり聞く、仮服用のお面の製作や、窓にはる切り絵の製作……。

二十二日の Rosenmontag は、園児は、各々前から決めた配役の仮装をして登園する。今日の園は、赤頭巾、白雪姫、薔薇の王様、魔女、騎士、インディアン、馬、兔等と、どこか小人達の御伽の国に行つたようだつた。八十一時までは、仮装姿で級の部屋で自由に遊ぶ。登園

した当初は、慣れぬ姿に何かぎこちなかつたが、流行のレコードが流れ始める頃になると、仮装の人物らしく生き生きと動き始めた。特別の、皆で作ったポップコーンと、園で用意したお祝いのケーキとオランジエンザフトを頂いた。その後、講堂に集り、皆で簡単なオペレッタをした。帰宅後、家人の人と街の化装行列を見にゆき、飴、チョコレート、ミモザの花、小さな玩具等を拾う。

二十三日の懺悔の火曜日は、各々思い思いの自由な化装で登園し、十一時まで自由遊び。その後、「ブレーメンの音楽隊」等の短い映画を見た。

次の三月のテーマは「日本」であった。そのテーマを決めた理由は、次のようにある。日本人の園児が、ある日の御八つに、日本から送られてきた小魚の燻製を持っていき骨までおいしそうに食べていた。ドイツ人の子どもが、それを見て驚いてしまい、日本人は何を食べ、どんな生活をしているかという疑問を持ったことに始るという。第二週の世界地図の中の日本を見つけることから始まり、日本人はどのように話し、どのようにして料理

して何を食べるかという子どもの疑問に答える為、日本人の母親が園にゆき、日本語を話してみせたり、天麩羅の実演をして見せ、園児と一緒に食べた。折紙をしたり、日本の絵本「牛若丸」を先生に読んで貰う。日本に復活祭の兔はいるかを話し合う等と続いていった。子どもの素直な驚きや感動を大切にして、外国人をも配慮した保育がなされていることに感心した。

ドイツ語を教わっていた友人の母親が、別の幼稚園の先生をしていたので、「何歳児を教えていますか?」と不用意にも尋ねてしまい、「幼稚園では教えているのではない、一緒に子どもと遊んでいる」と断言され、ドキッとしたことがあり、ドイツはやはりフレーベルの国だと思ったことが忘れられない。

おわりに

西ドイツは、小さい子どもと共に生活する場合、冬の寒さを除けば、日本より生活し易い。幼稚園⁽⁴⁾、基礎学校とも午前中丈で終るので、子どもの時間が自由でゆっ

たりと流れている。子どもに寄せる細かい心使いが随所で見られ、娘と一緒に困ることが少なかつた。

例えば、子どもの生活用品は、派手ではないが、発達しつつある子どものことを考えた良質の物が豊富にあ



▲エルベルト書店の子どもコーナー

る。(特に玩具、靴等)

バスには、ベビーカーに子どもを座らせたまま乗ることができる、中央部に、ベビーカーを置く広い場所が確保されている。面白いことには、人間程もある犬が、ベビーカーの横にきちんと座っている。犬の場所もここなのである。ドイツ人が厳しい躾をすることから「犬と子どもはドイツ人に育てさせろ」と言われるが、犬は良く躾られていて、粗相をしたり、騒いだりするのを見たことがなかつた。子ども達が、車中で騒いでいて、注意されている姿を見かけることは時々あつた。社会全体が、子どもを厳しく躾、守り育てている。

「ドイツには、美術館、博物館が多い。そこで、いつも楽しそうに見学している基礎学校の子ども達に会つた。子どもも向けの詳しい案内書が用意されている所もある。ニューヨンベルクの玩具博物館、フランクフルトのゼンケンベルク自然博物館、もじやもじやペーター美術館、ミュンヘンのドイツ博物館と、二歳の娘でも退屈せずに見られる所があるのは嬉しかつた。

本の老舗エルベルトには、寄せ木細工の六畳位の子ども

ある。

のコーナーがあつた。そこには小さな机と椅子が置かれ、子どもが自由に読むことができる非売品の本が並び、大きな縫いぐるみの熊が待つていた。最初の子どもの絵本『世界図鑑』(コメニウス著)が、世界中の何処にも先駆けて、ラテン語とドイツ語で出版された(一六五八年)のも、ドイツ、ニューヨンベルクの一書店からだつたのを忘ることはできない。

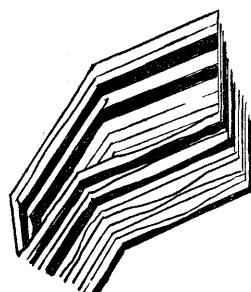
霧が深く、日差も弱い北国ドイツでは、子どもが成長しつつあるその過程が、大切に考えられており、ポール・アザールの言うように少年時代という楽園が立派に存在する。浪漫あふれる冒險や旅の好きなドイツ人が、目的地に着くことよりも、旅^{ツイゼ}をしていることの方を大切にするように、人生という果しない旅の始めである子ども時代が、長く続くよう配慮されている。ゆっくりと長閑に流れる時間の中で、成長しつつある子ども時代が大切に扱われ、小さい大人としての中途半端な場所でなく、子どもの為の確固とした場所が与えられているので

注(1) 高橋健二『グリム兄弟』新潮選書 昭和43年

(2) ^{*シンドル}児童手当は、第一子50 DM、二子80 DM、三子150 DMと、子どもが多くなる程、子ども一人当たりの額も増す。(一九八一年)

(3) 幼稚園でのラテルネについては、拙稿『マールブルク子ども歳時記』舞々5号で述べた。

(4) 親の希望により、午後も保育を受けられる場合もある。



朝に思う（2）

津　守
真

保育における繊細の精神

四月のはじめ、私は庭に出ると、新たに入園した三才のダウンズ症のKが、砂場のへりで、ごく自然に遊びはじめているのが見えた。少しはなれて、実習生が砂をいじつておらず、Kのことを見守っているのが分ったので、私は安心して他の子どもたちの方に向った。それからしばらくして、Kは次第にもっと大きな動きをして遊んだ。

保育が終つてから、私は、その実習生に、そのときの様子をたずねた。実習生は次のようなことを話してくれた。

Kは、最初、動くものに興味をもつてゐるようだつた。あまりじつと見ているとわるいから、私（実習生）は少し離れたところにいた。それから、近くにあつたボールをKの方にころがした。Kはそのボールを別の方向にころがしたりしていたが、そのうちに私の方に投げてくれるようになった。私は少し遠くの方で何かをしていると、しばらくして、Kは私の方に来るようになつた。

以上は、実習生が話してくれたことであるが、私はこの話の中に、保育者の繊細な配慮があるように思つた。第一に、この子どもはほんの少しだが何かを自分の手で動かしており、この実習生は、その小さな動きに価値を認め、それを見守つていた。第二に、あまりじつと見ているとわるいから、少し離れたところにいた。小さな子どもにも、一人前の人としての配慮をした。また、じつと見ていると、見る行為 자체が自然でなくなるから、視線をはずした。第三に、ボールをころがし、この子どものが興味である動かすことに自分も参加した。そのうちに、子どもの方が近寄つてきて、そのあとは一緒の遊びになつていつた。保育は、相手に対して人間としての敬意を払い、その場面の微妙な動きを感じし、全体に対す

る公平な判断のもとに、自らがきめてゆく行為である。

その中で、子どもも自分の感覚で世界を知り、自分の判断で行為することができるようになる。

パスカルのパンセに、「幾何学の精神と繊細の精神との違い」として次のように述べられている。

「前者においては、原理は手でさわれるよう明瞭かであるが、しかし通常の使用からは離れている。……繊細の精神においては、原理は通常使用されており、皆の目の前にある。……ただ問題は、よい目を持つことであり……この方の原理はきわめて微妙であり、多数なので、何も見のがさないということがほとんど可能なくらいだからである。……」

(パンセ 一、前田陽一編バスカル 中央公論社 P.65
傍点筆者)

バスカルは幼児の仕事をした人ではないが、人間を育てる仕事である保育の原理の根本にふれている。

保育環境とは何か

六月のはじめ、朝、庭に出ると、すでにHが来ていた。Hはことばをもたず、緊張質で、周囲で理由がわからず

らずに泣くことが多い。

この日、Hは、庭の真中をまっすぐに歩いて、前端の植えこみまでゆき、椿の木や、しんじゅ（神樹）の木の上の方向をながめていた。しばらくしてから、後向きに少し歩いたが、方向をかえ、前方に向い、部屋の方にすたすたと歩いてもどった。

まつすぐ歩くというのは、目的意識をもつて目あてに向つて歩いてゆくことであり、Hがそのような行動をしたことに驚いて、私は見ていた。植えこみまでいって、木の上の方向をながめているのは、何かひかれるものがあるように思えた。

数週前に、Hがいないと思ってさがしたことがあつた。そのとき、私は、この同じ場所で上の方向を眺めていたHを見つけた。私は不思議に思い、一緒にそこに立て上を見ると、丈の高いしんじゅの木の葉の間から、太陽が射し入り、葉の隙間から、水玉が反射するように、光がキラキラと輝やくのが見えた。子どもと同じ位置に身を置いてみると、こちら側からは見えない光や色が視野に入つてくる。子どもは私とは違う感覚をもつていてから、もっと違つたものが見えているのかもしねれない

が、これだけでも、私には、Hはこの場所を選んできて
いるのではないかと発せられた。

上を眺めることのできるときは、空間のひろがりがで
きたときであり、余裕のある時間もつことのできたと
きである。緊張質のHにも、こういう余裕ができたこと
を示す行為であると思う。Hは、ある種の感情をこめ
て、しばらくの時間、上方を見めた。それから、はつき
りと自分で方向をかえて、部屋にもどってきた。

上をながめたとき、木の葉のみずみずしさがあり、空
から光が射してくる。こういう自然環境があるときはさ
いわいである。しかし、ふだんはあたりまえと思つてき
たこういうことが、都会ではあたりまえでなくなる時が
ある。これが都会の人工物に代わるとき、自然の神秘さ
と人間の神秘に対する感覚が損なわれてゆくのではない
か。

この夏休み、この庭のすぐわきに、大工事が始まつ
た。コンクリートの建物がこわされ、高層のビルが建
つ。緑の植込みは取り払われ、それに代つて、白い防護
布で帳りめぐらされた。神樹の木は半分枝をとり払わ

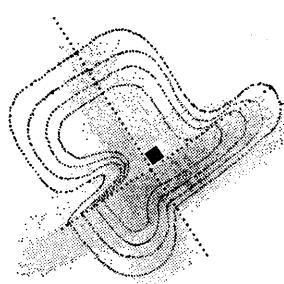
れ、すでに実をつけていた柿の木は、棒杭になつてしま
つた。夏の炎天のもと、上を見上げると、まばらな木の
枝は、太陽を遮ぎる蔭もつくらない。夏休みが終つて再
びが登園してくるとき、彼はまたこの樹の下に入るだ
うか。

都會の只中で、子どもたちを守りつづけることがいか
に困難なことか、私は、身をもつて、痛感している。

この場合は、全体から見れば、まだ特殊な例かもしれ
ない。しかし、いま、地球のあちこちで、エチオピアや
ネパールで、大規模の沙漠化が起つてているのを見ると、
保育環境から自然の恵みが失われてゆくのは、悲しいこ
とながら、これから世界の動向なのかもしぬれない。そ
う思つて見直すと、私共の周囲で、自然の園庭に恵まれ
ている幼稚園、保育園、学校は、決して多くはない。

ビルの谷間で、幼児や障害児を保育することがどこま
で可能だらうか。人間的な環境がどこまでこれを補いう
るだらうか。しかし、どんな事態の中でも、おとなは子
どもを守り育ててゆかねばならない。いま、私共は、いか
にしてそれを可能にするかという、否応なしの課題の
前に立たされている。

幼稚園さまざま



木原溥子

現在は幼児教育に関する研究発表や論文の数が非常に多く、最近のこの分野の進歩のありさまを感じさせられます。また保育雑誌には現場のすばらしい実践記録が掲載されていて、幼稚園の教育が熱心な先生がたによつて支えられていること、また、園児たちは幼児期のよい経験をしているなあということなども感じさせられます。

しかし、熱心にまじめにとりこんでいる幼稚園が多い一 方では、あまり書かれることもないもやもやしたもの、子どもたちのためによい保育をしようとはりきつてこの道に入った先生がたを戸惑わせるものをもつている幼稚園のあることを否定できません。また新しいことをどこかではじめると周囲の幼稚園がみなマネをする、自分の幼稚園の特色を出そうとして違うアイディアを実行しようとすると、それがまたまねされて流行になる、そこへ商

業主義という波がかぶさつて幼稚園同士のものまねとか流行がたいへん盛んになるようです。幼稚園はまさに色とりどりで水準も質もまちまちですが、日本の学校教育の中では幼稚園がもともと自由がきます。この自由がきくという特長をもつと有効に使いたいと感じさせられます。

それから私が直接、間接に見聞したいくつかの現場の問題を実例をあげて考えましょう。

1 理論を信奉する幼稚園

倉橋惣三の「幼稚園雑草」の中に「幼児の教育者」という章があり、その中に「子どもから学べよ」という一文があります。そこにフレーベルのこと、モンテッソリーのことなどが書いてあります。「フレーベルの彼の教育的創見は……一つには彼がよく子どもに学んだ結果であるといえる。幼稚園教育の第一原理たる、『自己活動』の原理論は、フレーベルの頭から織り出されたものでな

く……、ただよく子供から学んだのである……。その教育方法として用いられた遊戯でも手技でも、万至色々の教育玩具でも、いづれも子供から教えられ、子供自身の生活から思いついたものである」云々……。

「この頃多くの人の注意と敬服の的となつてゐるモンテッソリーの教育意見及びその考案なるものは…………」

幼稚園雑草の初版は昭和23年7月ですから30~40年前のことになります。今日とは時代も変わり人も変わりましたが真髄を理解した上で実行しよう、信奉しようというあたり、今も30~40年前も同じと思ひます。

一例ですが、ある幼稚園では誰かえらい人の講演会がありますと、それを聞いた園長さんが共鳴したのでしょう、間もなく「ここの方針は誰だれさんの理論で致しました」と宣言します。クラスで子どもを担任する先生は目をシロクロして、あわててその勉強をするとい

うことになるようです。やるならば十分に研究消化してからとり入れたいのですが、どうも目新しさを追う風潮、子ども不在の風潮を感じてなりません。子どものための幼稚園ですから、子どものために意義があるのか、効果があがるかどうかなどの吟味を先生がた皆さんで重ねてからにしたいものです。とくに現代は児童教育の論議もさかんです。いろいろな意見もありますし、また保育観も人により違うこともあります。しかし十分な理解

なしにそれらの理論をうのみに保育の現場に導入されましと、担任の先生も困るし、一番迷惑をうけるのは子どもであることを忘れてならないものです。

また最近は発達理論の研究もすすんできました。例えばピアジェが子どもの思考を調べるために行なった実験が保育の現場に導入され、ピアジェの数の指導の研究会が各所でひらかれております。思考をのばす保育として用いられているようですが、ピアジェはそうは言つていませんという批判もあります。熱心に研究会を開いて勉強するという姿勢はとてもよいことですし、それが子ども

のために役立つならば、すばらしいことです。しかし十分な勉強、吟味、消化なくして、形だけ何でも性急にとり入れる傾向がないとは言えません。ともすると何かに偏りがちな現代には、絶えず反省も必要ですし、ふみとどまる勇気も必要と思われます。

2 指導過剰型幼稚園

近頃、幼稚園では「教育」ということばのもとにいろいろと教えこむ内容が多くなったり、子どもに指示したりすることが多くなったような気配を感じます。これは注意しなければならないことと思います。

ある幼稚園で見聞したことですが、新しい先生が、朝の自由遊びのときに子どもから、「先生、きょうは何をしたいの?」と聞かれました。「好きなようにしていいのよ」と答えましたところ、「先生、何をしたらいいか教えてよ、その方が僕、らくだよ。でないと何していいかわからないんだもの」と言わされたそうです。日頃、

教えこむ方が多い保育をしているといつゝい、自由遊び
までも先生が指図をしているのかもしれません。ある先生
は「教師が言つた通りに子どもは動いてくれるし、直
さればそのように動く。しかし、これでいいのかし
ら？」と疑問になる。好きなようにさせたいと考えたと
きにも『これしていい？　このようにしていいの』と聞
きにくる。これでは自分で考えて行動することができな
くなってしまう。日頃、教示や指示、命令の多くなって
いる自分を反省しています」と話しておられました。

アメリカの母子のコミュニケーションの実験ですが、
親が命令型の多いタイプほど子どもの概念形成のレベル
は低いという結果がありました。幼稚園教師と子どもの
間にも参考になることと思います。

また教えこむ内容があふえてきますと、それだけで子ど
もの自由な活動はせばめられてしまうのですが、あると
ころでは遊具もいらないのではないか、ひとつ試してみ
ようというわけで、保育室の遊具を全部片づけてしまつ
たということもありました。「何をしたらしいの？」と

教師に聞きにくるので、先生は返答に困ったそうです。
でもそこは子どものこと、やがてその部屋の中でテレビ
のスターのポーズのまねなどして遊びはじめたようで
す。戸外ならば、砂（土）と水（できれば太陽が出て）
があれば子どもは遊ぶことができますが。

3 各種学校型幼稚園

絵の先生、体操の先生が週に1ないし2回ほど幼稚園
にきて指導するというところがあふえてきています。専任
職員で常時いる場合もありますが、非常勤でその曜日、
時間だけ来て指導なさる場合には、その日の保育の流れ
を考慮する必要があります。このようなケースが多くな
つてきましただけに、このようなときのマイナス、プラスを
検討してみるとよいのではないでしょうか。

ある幼稚園では、体操の先生が週2回みえるそうです
が、子どもたちはたいへん喜んでいるそうです。実を言
うところは極端な安全主義の幼稚園で、スリ傷一つでも

大げさに心配するし、階段ポンととび下りることも「あぶないからいけません」と禁止されています。ところが、体操の先生が指導する時間はその先生に任せているので、子どもたちはこの時ばかりは身体を思いきり動かすことができます。担任の一人は「子どもたちにはエネルギー発散の場となっているので、子どものためにこれは容認している」と複雑な顔をして話してくれました。ちょっと本末転倒の話で、まじめに追求するところじれそうですが、こんなところに現実の担任教師の悩みがありそうです。プラス、マイナス両方の面が考えられますが。

ある新設園の入園要項には宣伝になるようなことがズラリと並んでいます。「体育の専門家の指導による健康教育、絵の専門家による指導、音感教育に力を入れること、文字、数の指導すること」など、幼稚園といふよりも「〇〇教室」という看板の方がふさわしいようなことを書かれていました。園児の数が減少する時期で、経営上の御苦労も多いことと十分お察し致しますが、お隣りがやっていることはうちでも、という気持でなくて、もう少し、幼児教育本来の姿をうち出してもよいと思いました。

また別の幼稚園では、周囲が自然環境に恵まれ、動く場所は十分ありますし、先生たちも平常保育に意欲的で、教材も遊具もみな手がけるほどの力を持つており、元気いっぱいです。しかしそこにも、曜日をきめて体操の先生が来られます。その日は、朝登園した子どもは園内をただプラプラして待っていて、何とも、もったいない朝の一ときなのです。このくらいの幼稚園ならば、体

以前に、園児が集まらないで閉園を考えていた幼稚園がありました。そこは園舎も子どもが活動しやすいよ

うによく設計されていましたし、子どもをたいせつにする幼稚園でしたから、経営上の理由で閉鎖するのは非常に残念だ、と友人のN先生は考えました。機会があったのでその幼稚園に行き、地域や園児の親たちに、こういう幼稚園こそたいせつにしたい幼稚園だという話をなさったそうです。その親たちは熱心に聞いてくれまして、翌年からは園児も集まり、運営の体制を少し変えて今も存続しております。この苦境のとき別の幼稚園の方から、「文字や数を教えると宣伝すれば園児は簡単に集められますよ」と言われたそうですが、それをとらずに、本来の幼稚園の姿を説いた結果、苦境を脱したというすばらしい実例がありました。

4 小学校予備校型幼稚園

小学校の教育課程の一部を先まわりして学習する代表は、文字や数でしょう。幼児一人ひとりの興味や好奇心にあわせて指導がなされるならば問題はないのですが、

一律にどの子どもにも、という形になるから、どうしても是か非かの論議になってしまいます。

実を言うとある幼稚園では、かつてその地域の園児が急増したときがあり、たくさんの園児が同時に園庭で交代で園庭で遊ぶことにして、半分は室内ですごすことになりました。そして室内では十分遊べないので、何か一斉にさせるにしました。ちょうどワークブックがあつたのでそれを使うことにしたところ、やめられなくなつてしまつた、ということです。当初、施設の制度から始まつた文字教育でしたが、親の希望やらワークブックの売り込みなどで、内容も次第にエスカレートしがちです。

別のある幼稚園では、同じようにはじめましたが、ワークブックの利用の仕方が子どもの実状にあっていないことに気がついて、自由遊びの中で好きなとき好きなように興味に合わせて使えるようにしたということです。賢明な幼稚園だと思いました。

本誌の愛読者には御存じの方も多いと思いますが、黒田実郎氏らの漢字指導の調査結果があります。4歳および5歳のときからそれぞれ漢字教育をうけてきた5歳児と、うけなかつた5歳児について50字の漢字テストを5回実施したところ、この時点では効果があった。しかし、卒園後約1年半後になって、以前の50字に字追加して100字について調査したところ、学習してきた方が50.4字、指導をうけなかつた方は48.9字というわけで、その差はほとんどのくなつていていたということです。この結果に対する考え方をされることはありますか、いずれにしても早教育は一人ひとりの発達にあわせて考えたいと思ひます。最近では、漢文まで教えているところがあると聞いております。

余談ですが早教育については私が忘れられない滑稽な古い話があります。かつて早教育論がはなやかだったアメリカでは、10年の間に、文字教育は3歳からが2歳からになり、いや1歳8か月からできます、と次々にエスカレートし、ついに文字教育は胎児から、と大まじめに

言う人があらわれる始末でした。これはいけないとある時気がついて、早教育に対する反省が行なわれたといふ今では信じられないような笑えない本当の話です。日本ではまさか、と思ひますが。

5 過干渉の安全型幼稚園

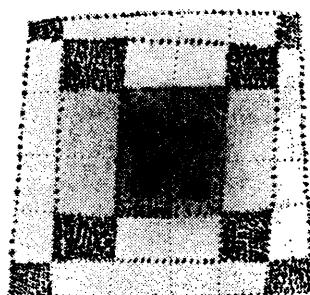
近頃では入園した子どもが30cmの高さもこわがつて降りられないと驚かれる幼稚園の先生がいるかと思えば、幼稚園側が「あぶないからいけない」と階段一段とび降りるのも禁止してしまった幼稚園もあります。事故でもあつたら大変ですし、もののはずみということもあるので十分注意はしなければいけませんが、安易な安全教育は子どもの生のエネルギーを育てることができません。子どもにとって多少の冒險や未知との遭遇は、生きるよろこびを感じさせる貴重な刺激です。子どもの生命のエネルギーを不完全燃焼に終らせないようにはすることは、将来のためにもたいせつなことと思ひます。

幼稚園の中には極端な安全型に対して、かなり冒險的な幼稚園ももちろんあります。周囲の自然をふんだんに活用できる幼稚園の多くは、毎日のように裏山にのぼったり、海岸や河原を歩いたり、木に登ったりなど、大いに子どもたちのエネルギー発散の場になっています。それができない都市の幼稚園でも、場所をみつけては散策したり、また、道具を使わせるなど、安全に気をつけながら日々の活動をいとなんでいるところもあります。

※ ※

それぞれどこの幼稚園も懸命の努力をしておられます
が、幼稚園が多様化して、担任の思うようにならないこ
とがふえています。幼稚園同志の研究会もますます必要
でしょうし、またそれぞれの教師が子ども一人ひとりを
理解して育て、自らも育ち、そして幼稚園が幼児教育本
來の姿にたちかえることを望みたいと思います。

(洗足学園短期大学)



ガンダムごっこに関する研究（その一）

——ガンダムごっこに関する保育者のイメージ——

村松三恵子
太田 恵子

▲研究のねらい▼

子どもたちは、日常保育のさまざまな場面で、テレビの登場人物に扮した「こっこ遊び」を展開しています。

なかでも格闘シーンを中心とするテレビ番組の登場人物に扮して遊ぶ活動は、子どもが好んで展開する活動の一つです。しかし、この活動に関する叙述は、きわめて限られました形でしか取り扱われていませんし、体系的な研究は

皆無に等しい現状です。たとえば過去五年間に刊行された雑誌、著作物から関連記事を当つてみますと、この種

の遊びは、おおよそ次の三つの範ちゅうの中取り扱われているように思います。

- 一、テレビの及ぼす悪影響の具体例として。
- 二、変身あそびに位置づけて、その事例として。
- 三、保育者の指導例として。

このように闘いあそびは「TV」とか「変身あそび」

か、あるいは「指導」というフィルターを通して扱われており、このあそび自体の分析が充分にすすんでいません。

保育者に即して言えば、闘いあそびに関する基本的知識をもたぬまま、日々この活動をとらえ、かかわっている現状であるということができます。そこで、本研究は、保育者に求められている闘いあそびに関する情報の実態を明らかにするために、「保育者がこのあそびにどのようなイメージをもつてているか」を、次の五つの観点から明らかにすることをねらいとしました。

- 一、活動の有無について。
- 二、保育室内の活動として、どのような応対を必要とする活動とみてているかについて。
- 三、どのような意味をもつてているかについて。
- 四、どのような学習の必要のある活動とみているかについて。
- 五、保育者のこのあそびの意味づけ方と、このあそびの対処との関連について。

▲研究方法▼

前述の五項目について自由記述方式による質問紙を作成し、横浜市中区の幼稚園一三園に、各五枚ずつ計六五枚配布しました。回収率は四九%で三二枚が回収されました。

▲研究結果▼

第一に、「活動の有無」については、三二名中三〇名の保育者が、この活動の存在を認められており（表-1 参照）、この活動が保育室で認知されていることが伺われます。第二に、「闘いあそびに対する具体的な対応のしかた」については、表-2をご覧ください。この表は、回答者三二名の延べ一八七の対応を、かかわり方のレベルによって、積極的からその他まで五つに分け、さらにその時の闘いあそびの様態別に集計したものです。これによりますと、延べ一八七の対応中、七一%に当たる対応が直接のかかわりで、積極的・中立的・拒否的か

かわり方がほぼ等分に分布しています。また、子どもの遊びの様態別に保育者のかかわり方の傾向をみていきますと、次のような四つの特色がみられます。

①「バキュー」とか「バーン」というような音声による働きかけには、「やられたー！」といつて倒れたり、同じようにやり返すなどの応対・応戦といった積極的なかかわり方が圧倒的多数を占めています。

②キックやチョップ、またはその真似ごとをするというような身振りによる働きかけには、約束・注意・禁止などの拒否的なかかわり方が多く、次いで傍観が多いことがわかります。

③闘いあそびに必要な物の要求に関しては、要求をしてきた子どもにその使用目的を尋ねたり、新聞紙・広告紙・ダンボール等の素材を渡すなど、中立的なかかわりが大半を占めています。

④けんかについては、子ども同志で話し合いをさせる等の中立的なかかわりと、危険が伴わない限り見守るといった傍観的な対処が圧倒的多数を占めています。

以上のことから全体をみると、闘いあそびがどのような形態をとって展開するかによって保育者のかかわりは異なり、保育者は自らのかかわりを調整していることがわかります。つまり、音声に対しては最も積極的に、身振りに対しては拒否的・傍観的なかかわりを示す傾向が強く、物の要求については中立的、または消極的であることです。第三に「保育者がガンドムに代表される闘いを中心としたあそびにどのような意味を認めているか」については、自由記述したものの傾向を分類すると、子どもに即して活動の意味を見い出している場合と、保育者側に即している場合とに大別され（表—3参照）、前者、すなわち子どもに即して意味をとらえていた場合が圧倒的に多いことがわかりました。また、子どもに即して意味をとらえている場合、子ども同志のつながりが深まるというように、子どもたちの対人関係に意味ありとする保育者が多いこともわかります。第四に「このあそびに関する学習の必要の是非」については、三三一名の回答者のうち、約七二%の一二三名がこの遊びに

関する学習の必要を認めており（表—4参照）、保育者は

このあそびの認識を深める必要性をはつきりと自覚して

いることを示唆しています。また、学習力不必要と回答

した人の理由は、この活動を子どもたちだけですすめるべきであるから無干渉でよいとするものです。第五に「保育者のこのあそびの意味づけ方もそのあそびへの対処のしかたとの関連」については、その活動の意味を子ども中心にとらえるか、保育者中心にとらえるかによって、あそびへのかかわり方が著しく異なります（表—5 参照）。子ども中心にその意味をとらえている者が合計七〇の対応をしているのに対して、保育者中心にその意味をとらえている者は、四分の一の一六の対応しか示していません。また、活動の意味づけ方とかかわり方との関連については、闘いあそびの意味を記入しているといふことにかかわらず、音声では積極的、身振りでは拒否的・傍観的なかわりが多く、物の要求に関しては中立的ななかわりが多い傾向がみられ、従つてこのあそびは、意味を意識してもしなくとも、かかわり方を均一に

する強力な働きがあると考えられます。

▲考察と展望▼

以上のことと要約してみると、第一に保育者はそのあそびを、単に乱暴なあそび、または人を傷つけるあそびと決めつけず、むしろ、子どもたちの対人関係にとつて意味ある活動とみてること、しかし第二に、このあそびに関する認識の不足は、保育者がはつきりと自覚しており、そのあそびが意味ある活動と感じつつも、どのように対処したらよいかわからないままかかわっている現状であること。そして第三に、保育者がこの活動の中に「危険」な場面を見い出すか否かで、かかわりが大きく変化する傾向のあることです。つまり「危ない」と思つた瞬間から保育者は拒否的なかかわりをしたり、あそびに使う物の要求に対しては、一様に「紙」という素材を与え、危険度をやわらげる配慮を無意識のうちに行つており、音声に対しては積極的、身振りに対しては拒否的・傍観的物の要求に対しては中立的と、そのふるまい

方にステレオタイプの傾向がみられることがわかりました。

以上の研究結果から、今後の研究方向として、保育者が直観的にとらえている闊いあそびの対人関係の発展における意味に注目して活動の経過を詳細にとらえていくことの重要性が示唆されているように思われます。

(横浜学園付属元町幼稚園)

表 1

承認	否定	無記入	合計
30	0	2	32

表 2

対処		様態	音声	身振り	物の要求	けんか	合計
かかわる	積極的	37	5	0	0	42	
	中立的	0	6	19	21	46	
	拒否的	2	29	8	6	45	
傍観		2	10	8	18	38	
その他		5	1	4	6	16	
合計		46	51	39	51	187	

回答者32名が延187の対応を示している。

表 3

子どもに即して		保育者に即して		その他	無記入	合計
(1)ー1 自己の願望実現	(1)ー2 対人関係的	(2)ー1 道徳的	(2)ー2 保育手段的	/	/	/
7	9	3	1			
16		4		5	7	32

表 4

(1) 必要あり			(2) 必要なし			無記入	合計
保育者の認識の深化	あそびの発展・健全化	平和教育	未分類	無干渉	無 視	無記入	
13	3	2	5	3	1	1	
23			5			4	32

表 5

様 態	音 声	身 振 り	物 の 要 求	合 計
対処 意味付	a d c b e f	a b c d e f	a b c d e f	
自己願望実現	9 1 1	3 1 5 1	5 3 1	30
対人関係	10 1 1 1	3 1 8 4	8 3	40
道徳的	2 1 1	4 1	3	12
保育手段的	1	1	2	4
その他	6 1	1 4 1 1	4 1 1	20 20
無記入	10	2 7 3	5 1 2	30 30
合 計	37 0 2 2 2 3	7 4 29 10 0 1	0 27 8 0 0 4	136
	46	51	39	

注 対処 a ……積極的かかわり
 対処 b ……中立的かかわり
 対処 c ……拒否的かかわり

対処 d ……傍観
 対処 e ……その他
 対処 f ……無記入

十六世紀フランスのある早朝、情人の

しとねから脱け出して自分の城へ密かに
帰途を急いでいたフランソワ一世が、教

会の前を横切った。と、そのとき、教会
では、朝のミサが始まり、鐘の音があた
り一帯に流れた。すると、王は、ためら
いもなく教会の中に歩み入り、敬虔にミ
サを捧げたといふ。

この逸話は、一体、何を物語るのだろ
うか。フランス人の不道徳性あるいは、
キリスト教徒の破廉恥ぶり？ フランス
の歴史学者リュシアン・フェーブルやフ
ィリップ・アリエスは、そのいずれでも
ないという。つまり、この当時の人々
は、こうした二つの感情、つまり現在な
らば、密通の快楽と神への敬虔さとい
う、明きらかに相反する感情を、格別相
反するとも矛盾するとも感じることな
く、平然と同居させ、両立させていたと
いう、歴史的事実を物語るエピソードな
のだ。確かに、人間とは一箇の統一され

た自我主体であるなどという観念にとら

われなければ、様々な価値感や感情がま
ろやかに仲よく同居していく、それが交

々表われたり隠れたりしても、全然不思
議はない。そもそも、矛盾とか分裂とか
いう概念は、同一性との関係で存在して
いるのだから。

私どもは、いつの頃からか、人間の心

のありようは普遍的であると思いこんで

しまったのではないだろうか。例えは、

子どもへの愛情は歴史を通じて流れ続け

てきた真理であるなどと、心のどこかで

信じている。だから、「子どもが好きか

どうかわからない」という母親に出会っ

たりすると、世の終りが訪れたかのよう

に怯え、うろたえる。然し、私どもが、

子どもを可愛いと感じている感情もま

た、歴史性を持つのだとしたら……。時

代はいまより目にきている。子どもへの

感情は、どのような変貌を遂げるのだ

(H)

幼児の教育 第八十二卷 第十一号

十一月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十八年 十月二十五日 印刷
昭和五十八年 十一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行人 本田和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!!

保育の再点検 (全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ(全5巻)です。

本シリーズの特色は、
●日常的で身近なテーマを取りあげています。
●保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
●現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価6,750円

近藤充夫 監修
一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動 (全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 共著

- 1、大型遊具を使って
- 2、小型遊具を使って
- 3、かけっこ・プール
・運動会

一斉活動でのびのび育つ幼児の運動遊び集大成。保育を楽しくする画期的な全3巻です！

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐにわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

B5判・各200頁・定価各1,800円・セット定価5,400円

新刊！

こゆびどうわ (1) (2)

東 君平・著

A5変形判・上製本・(1)(2)とも各72頁
定価(1)・(2)とも各900円

赤ちゃんのこゆびの
ように短くてかわいいお話集。

ふだんのさり気ない暮らしの中のできごとを、子どもの心とあとなの視線をまじえて、独特な絵とともに描いた東君平の短い短いお話集。

すべて書きあろしの32篇がそれぞれの巻に収録されています。

保育の中で子どもにお話をねだられたとき、先生が一人で味わいたいとき、そして親子で読書をしたいとき、それに楽しめるお話集です。

東 君平——独特な絵と文で、毎日新聞の「おはようどうわ」をはじめ、童話や絵本の分野で活躍中。